

ぼっち・と・ぼっち！

承認欲求モンスター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ボツチな男子高校生、比企谷八幡は、とあるきっかけからボツチな女子高生、後藤ひとりと関係を持つようになる。

孤独に生きてきた二人は惹かれ合い交流を深めていく。

そして比企谷八幡は、ひとりのバンド活動に巻き込まれていく

ボツチミーツボツチ。ボツチはボツチに惹かれ、時に反発し合う。

以下を目指しています

※比企谷八幡を過度に美化しない

※原作キャラを不自然に貶めない

目次

ぼっちみーつぼっち	1
どこか俺と彼女は似ている	7
誘い	12
転機	18
未だ彼はそれが何なのか知らない	24
ボツチの過去語りは長くて陰鬱	30
初バイトのぼっち	36
ボーカル探し	42
思わず、彼は言い募る	48
陽キヤにも色々ある	52
こうして、彼女は肯定される	59
やはり、彼女の瞳は綺麗な色をしている	64
頑張ると成長と動機と	70
はじめて、彼は熱にうかされる	76
ダメな大人とダメなぼっち	81
意外と、彼女は度胸がある	87

ぼっちみーつぼっち

学校の階段の下はデッドスペースになっている。使い道もなく、せいぜい使われていない机が置いてある程度。

いつも人気がなく静かなそこに、二人の人間がいた。

お互いの吐く息がうつすらと頬にかかる。そのせいか、俺の正面にある柔らかそうな顔は、薄っすら赤みがかっていた。

ちょうど、クラスメイトの後藤ひとりが俺の体にのしかかってくるような状態だ。身動きがとれない。今まで味わったことのない緊張に胸が支配されていた。先ほど正面からぶつかって仰向けに倒れたまま、後藤ひとりに声をかける。

「ちよ、早くどいてくれ。狭い。重い」

「ひ、ひどい……です。女の子に重いつて言ったら嫌われるって聞きました」

「お前友達いなくせに誰に聞くんだよ」

「うう……ひ、比企谷……さんに言われたくないんですけど……!」
なんでコイツは俺に対しては強気なんだ。普段の教室での様子から察するに絶対こんなキャラじゃないだろ。ボッチだから舐められる？

「う、うわああ、友達いなそうな人に友達いなだろって言われた……終わりだ。私はボッチ以下のボッチ、超ボッチなんだ……!」

超ボッチ……なんだろう、惹かれる名前だ。ボッチに人並み以上の矜持を持っている俺にとって、中二心を刺激する良いワードだ。

「うう……超ボッチ……ボッチを下回るボッチ……ふ、ふふ……」

「お、おい。帰ってこい。早くこの状況をどうにかしてくれ……」
後藤は勝手に自分の世界に入ってしまったって、俺の上から退くどころではないようだ。

いつも伏せられている目がすぐ近くで俺を見つめている。意外なほど澄んだ瞳。しかし、わずかに恥じらうように逸らされる。

……というか近い。いつもの陰気な姿からは想像できなかったが、

肌は白くてきめ細やか。髪はサラサラで、薄っすらといい匂いがする。

鼓動が早い。手汗が滲む。

これ相手にドギマギするなど、屈辱の極みだ。

気恥ずかしさを隠すためにも、少し乱暴に言う。

「いいから離れてくれ。勘違いされるだろ」

「かつ、勘違いされる相手いないじゃないですか……！ 大丈夫です。

私も見られて困る人なんて……うう」

後藤の目がグルグルと渦を描き始める。

ああ、なんだコイツ、めんどくさい！

「女のお前ならともかく、男の俺は勘違いされるとマズいんだよ！」

「お、女？ 男……？ いったい何の話をしているんですか？」

きよとん、という顔。

おい、マジかコイツ。ボツチすぎて自分が華の女子高生だってこと

まで忘れてるんじゃないか？

「俺が性犯罪者のレッテル貼られるって話だよ！ ほら、どいてくれ」

軽く後藤の方を押すと、彼女の体は存外簡単に後ろに倒れた。

「きゃっ……おうっ……」

おい、急に女の子みたいな声出すな。意識しないようにしてたのに意識しちゃうだろうが。

俺に押しつけられた後藤は、可愛らしい悲鳴をあげたかと思うと、尻もちをつく時におっさんみたいな声を出した。

「ふう……危なかったな」

「あつ、あい……」

先程まで好き勝手に口をきいていた後藤は、聞こえるか聞こえないか微妙な声で返事をした。

自分の世界から帰ってきて、もう完全に人見知りモードに入ったよ
うだ。

「ああー……そんなに緊張すんな、ほら。この腐った目を見る。同類
だ同類」

「どっ、同類……あの底なし沼の泥濘みたいな目の人と私が……？」

彼女は独り言のようにそう言った。失礼な奴だ。せめて死んだ魚の目くらいにしてくれ。

後藤は俺の足のあたりを見つめながらぼそぼそと話していた。そのおかげで、俺は真っ直ぐに後藤の顔を見ることができた。

真っ直ぐなピンク色の髪が、目元を隠すように伸ばされている。横にぴよこんと飛び出たアホ毛のようなものが、髪飾りに挟まれている。

相変わらずオドオドしていて、目は伏せたままだ。

ようやく落ち着いたので、俺はこの目の前にいる同類と遭遇することになった経緯を思い出していた。



ぼっちの特技とはすなわち人間観察だ。常に人の輪の外にいる冷静なボッチは、一步引いたところから人を観察できる。

まあ、一步引くまでもなく引かれてるんですけどね。フヒッ。

授業中に退屈を感じた俺は、自分の席にうつ伏せになり、眠っているかに見せかけてクラスメイトを観察する。

高校入学から1ヶ月。早くもボッチが確定した俺は、そうして日々の楽しみを見いだしていた。

例えば、俺の前の席でひそひそ会話をしているあの生徒二人。一人は楽しそうに話しているが、もう一人は少し退屈そうだ。友情を謳いつつも、実際は片方に負担を強いるいびつな関係。

まったく、あんなものに囚われるくらいならボッチの方がマシだ。そしてあの斜め後ろの生徒。ピンク髪に、野暮ったいジャージ姿。目元は長い前髪に隠れてよく見えない。彫刻のように動かず机の表面をじっと見つめている。

何をしているのだろう、と普通の奴なら思うかもしれないが、俺には分かる。あれは、自分の世界に入っているボッチの姿。

言うなれば深い瞑想に浸っている修行僧のようなものだ。我々俗人は、その崇高な試みをただ邪魔しないように崇めることしかできない

いのだ。南無。

後藤ひとり。まるでボツチとして生きること運命づけられたような名前の彼女は、熟練のボツチだ。長い前髪を垂らして常に下を向いているので、目が合わない。誰かに話しかけることも、話しかけられることもない。そして事務連絡などで話しかけると、どもりながら話し出す。その様はいつそ憐れなほどで、クラスメイトからは早くも「話しかけると怖がられるから触れないでおこう……」と放置されている。

下手したら俺より重症だ。俺は小町となら普通に話せるからな。クラスメイトに怯える具合も、俺の方がマシだ。

プリントを渡された時の返事が、後藤のが「はひっ……ひゃ、あひがとうございいます」なのに対して、俺のは「フヒッ……あざっす」って感じた。……いや、どっちも大して変わらない気がしてきたな。

「さて……今日も昼食のベストプレイスを探すかな」

どんぐりの背比べをしたりして、授業時間をやり過ぎすと、あつとという間に昼休憩だ。

ボツチ開放の時、我が世の訪れに喜びながら席を立つと、ふと後藤ひとりの姿が目についた。

「ふふ……ひひひひ……」

何あれ怖い……。

後藤はうつむいたまま一人忍び笑いをしていた。

「武道館……ソロライブ……拍手喝采……ふふ……」

要領を得ない呟きが聞こえてくる。

あれはボツチ特有の症状だ。ボツチが無口なのは何も考えていないのではなく、口を開く機会がないからだ。脳内は常人以上にうるさい。だから、たまにああやって漏れてくる。

後藤の場合、人にドン引きされるレベルで漏れてきているのが問題だろう。というか普通に気持ち悪いぞ……美少女がやってるから辛うじて許されるだけで、俺がやったら通報ものだ。

クラスメイトは一瞬彼女のことを見たかと思うと、すぐに視線をそ

らして何事もなかったかのように自分たちのおしやべりを再開した。これはつらい……何がつらいって本人が忍び笑いをしていてドン引きされている現状に気づいていないことだ。

さて……そういえば今日登校する時に気になった場所があったのだ。

東の階段の一番下。一階部分のそこは、空きスペースになっていた。ちょうど階段が陰になって、周囲からは見えなくなっている。あそこなら、ボッチが人の目を気にせずに昼食を取れるかもしれない。少しだけ浮足立つ気持ちを抑えながら、俺は階段を下りて行った。

——この時の俺は、ある可能性について忘れていた。

ボッチの収斂進化。命名は俺だが、なかなか的を射たネーミングだと思う。

ボッチたちは似通った行動習慣を取る。

例えば自由席の教室に座る時は、前方横に座る。前方正面の真面目な生徒の邪魔をしないように、かつ後ろの方に陣取るリア充どもに邪魔されないポジションだ。

例えばグループ決め。変に声をかけにはいかない。無駄な努力で恥をかくよりも、泰然と構えて余り物同士で集団ができるのを待つ。

だから、彼女と俺で昼食を取る場所一緒になってしまうのも必然だったのだ。

やはりいい感じの場所だ。ここなら俺のベストプレイスに相応しいかもしれない。人気の無い階段の下で、俺は満足していた。

教室の賑やかな話声が心地よいBGMのように聞こえる。掃除当番が頑張っているのか、床も汚くない。

そんな風に思っていた時のことだ。

静かだった教室に、ぱたぱたという足音がする。人数は一人。

騒がしい奴もいたものだ、と他人事のように思いながら、その場に腰を下ろそうとした瞬間。

「うわああああ！ さっき絶対笑われてたああああ！」

奇声を発しながらこちらに小走りに走ってきたピンク髪の生徒が、

俺の視界いっぱい迫って来た。

「うおっ！」

「ごぼっ……」

衝突する。しかしながら柔らかい感触。

——後藤ひとりの胸は意外とでかい。今回の衝突から俺が得た教訓だ。

どこか俺と彼女は似ている

「あ、あの……ちよつと待ってください」

「あ？」

予想外の言葉に驚きながら振り返ると、後藤は小さくヒイ、と鳴いた。

そんなに怯えるなら話しかけなきゃいいのに……。

しかし後藤は、青ざめながらも話を続けた。彼女としては、精一杯頑張ったのだろう。それは、震える足からも良く伝わって来た。

「そ、その……比企谷、さんはどうして友達がいなのに堂々としてるんですか？」

「え、何？ 喧嘩売られてる？」

俺はもしかしてボツチにボツチであることに喧嘩を売られたのだろうか。

「ち、ちがいます……！ その、私も友達いなくて……人と話す時どうしても緊張して……そ、それで比企谷さんはどうしているのかなって……あ、すみませんすみません。失礼なこと言って。ごめんなさい」

「いや、失礼なのはさつきからだからもう気にしてないけどな……」

コイツ、頭の中で思っていることが口から出てくるタイプだな。

「あー、なんだ。俺も別にコミュニケーションが得意ってわけじゃないから、大したことは言えないぞ」

「あつ、それは分かっています」

急に真顔になる後藤。

「お、おう……」

「で、でも、なんていうか比企谷さんは私とは違う気がして。常に他の人に怯えてびくびくしている私とは違った態度に見えるんです」

後藤の瞳には、切実な光があった。

「……まあ、そうかもな」

小学校、中学校と人と関わって気づいたことがある。

「人なんてそう怯えるものじゃないと思ったんだ。信用できないか

ら、最初から信じなければいい。距離を取ればいい」

「……さ、寂しくないんですか?」

後藤が胸の前で両手を合わせ、もじもじと動かす。

「いいや、全然。……っていうのは強がりかもしれないけどな。けど、一人だって存外楽しく過ごせる。アニメ見て、漫画読んで、ラノベ読んでれば幸せだからな。後藤には、楽しいことがないのか?」

「い、いえ……あります」

その言葉を言う時だけ、いつも伏せられている瞳は真っ直ぐにこちらを向いていた。

ああ、きつと彼女は、自分の譲れない何かを手に入れているのだろう。それはとてもいいことだ。

「だから、無理して友達を作ろうとする必要なんてないと思ってる。友達なんていなくても生きていけるし、楽しくやれる。友達という方が楽しい奴はそうすればいい。俺だって好きにやるからな」

人間関係を多く持っていることが優れたことのように語られる社会など間違っている。学校などその際たる例で、やれグループを作れだの、やれ協力してやろうだのと好き勝手言ってくれる。

声がでかいのは友達がいっぱいいる奴で、その代表みたいな奴が教師という羊飼いをやっている。

「別に友達がいないからってあいつらより劣ってるわけじゃない。むしろ、ポッチの俺の方が優れているまである」

ポッチの優れた点は、友人関係に頭を使わない分自分のことをひたすら考えられることだ。友情の意義について。学校の存在意義とは何か。

時間だけは有り余っているから、人よりも深い思考ができる。きつと、後藤だってそうだ。

「……お、思ったより自信满满で、ビックリしました」

「そうだな。虚勢だけは誰にも負けないつもりだ」

「で、でも、私はそんな風に生きられないですね」

後藤はまるで諦めるみたいに下を向いた。

「ひ、人と話す時はいつだって下向いちやうし、話そうとしても言葉が

出ないし、どんくさいし……もう学校辞めたいって思ってた、でもそう
なったらもうどうすればいいか分からないし、それで今日、たまたま
比企谷さんと会ったから、つい話しかけちゃって……」

後藤はそこで、急にハツとしたように顔を上げた。

「あ、すいませんすいません。なんかずっと独り言漏らして、めんどく
さいですよ。めんどくさい……そう、私はめんどくさい女。話しか
けられたら舞い上がって自分の話ばかりしてドン引きされた過去を
持つ女……うああ、フラツシユバックがああああ！」

後藤は急に大声を上げたかと思うと、壁に頭を打ち付け始めた。

「おいやめろ！ 黒歴史に悶絶する気持ちはよくわかるが、その勢い
で頭打ってたら死ぬぞ!？」

俺は後藤の肩を掴むと、必死に壁から引きはがした。

黒歴史のフラツシユバック。それは時に周囲の状況一切を忘れさ
せてしまうような恐ろしいものだ。俺もよく中二の頃の記憶とか思
い出して悶えるから分かる。

「まあ、なんだ。俺で良ければ話くらいなら聞けるぞ」

言ってから、自分の口からそんな言葉が出たことに驚いた。少し鳥
肌が立つ。そんなの、俺の大嫌いな無責任に明るい言葉をかける奴ら
みたいだったからだ。

「え……う？」

「別に助けようなんて高尚なこと思っちゃいない。ただ、お前が傷を
舐めあって少しくらい楽になるならそれもいいかと思っただけだ」

俺も卑屈なボツチだ。彼女の悩みを解決する術なんて知るよしも
ない。それでも、高校入って1ヶ月で学校辞めたいなんて言い出す奴
に、なにも言わずにはいられなかったのだ。

ああ、これはひよつとしたら俺が嫌悪する偽善というやつなのかも
しれない。

相手を助けるため、なんて嘯いてその実自分が気持ち良くなりた
いだけの、ひどい自己満足。

「な、なんで、そんなにしてくれるんですか」

「えっ？」

「ど、どうして、そんなにしてくれるんですか。わ、私なんてミジンコ以下のダメ人間なのに」

俯いてしまった彼女の瞳が隠れる。噛み締めた唇は震えている。

そんな彼女を前にして、俺は必死に思考を巡らした。やがて出てきた言葉は、自分として辛うじて納得できる理由だった。

「——お前のためじゃない」

「え？」

「お前は、昔の俺に似ているように見える。人に認められたくて、認められなくて、鬱屈した感情を抱えている。だから、俺がお前の状況を良くすることで俺は間接的に過去の自分を救うんだ。だから、お前にどれだけの価値があるかとかどんな人間かとか関係ない」

本当は、出来の悪い妹を見ているみたいだと思っただけだ。いや、妹の小町はこういう悩みとは無縁かもしれないが。とにかく、何かしなければという焦燥に駆られたただけだ。

「……なんですかそれ」

「なんだろうな。俺にも分からん」

ただ、そう言わなければならぬ気がした。

「ふっ……あははははは！ あはははははは！」

後藤は、急にお腹を抱えて笑い出した。いつも俯いて陰気な表情をしている彼女の屈託のない笑顔なんて、初めて見た。忍び笑いとも呆れ笑いとも違うその顔を、俺は呆然と眺めていた。

「あははははは！ はは！ ハーッ……あーっはははははは！」

「いや笑いすぎだろ！」

後藤はタガが外れたように笑い続けていた。瞳には涙が溜まつているし、膝をついて床をバンバンと叩き始めた。

「じゃ、じゃあ、比企谷さん」

「お、おう」

急に目を真っ直ぐに見てくるものだから、狼狽してしまった。真っ直ぐに見た後藤の顔は、思っていたよりもずっと綺麗だった。

「で、手始めに、私に友達を作ってください。十人くらい欲しいです！」

「すまん、無理だ」

「え……う？」

後藤の体がピタリと固まる。瞳は濁り出し、まるで死んだ魚のように。……どことなく見覚えがある目だ。具体的には、自分の顔を鏡で見た時に。

「俺も友達いないし」

「そ、それはその、誰かに話しかけるとか……」

「俺が話しかけてもキモがられるか怖がられるだけだからな。無理だ」

クラスメイトに話しかけても、まともな会話にならないからな。

少し胸を張って言うのと、後藤の体がしなしなと崩れ落ちた。

「た、頼む人を間違えた……」

後藤はへにやりと倒れ込むと、四つん這いになって落ち込んだ。

「おう。ようやく気付いたか」

「……」

こちらを見上げる瞳が、恨めし気に俺を見る。オドオドしている普段の態度とは違って、意外と迫力がある。

「そっちの顔の方がマシだな」

少し笑って、俺は顔を逸らした。

——本当は、俺が友達になってやるなんて似合わないセリフを吐くつもりだった。

冷静になった今思い返せば、それはあまりにもこっぴどかしい。

しかしそんな俺のなけなしの度胸も、後藤の「友達が十人欲しい」という願いを聞いてどこかに吹き飛んでしまった。

というかコイツ、結構凶々しいぞ……。

誘い

「うわあああああああああ！ 私、なんか凄い凶々しい奴だった気がするううううううううううう！」

自室の押入れの中で、後藤ひとりはまるで陸に打ち上がった魚のようにジツタンバツタンと跳ねていた。

どたどたという騒がしい音は、薄い襖から漏れ出ている。狭くて暗い空間に、ピンク色のジャージが暴れ狂う。

その顔は、元来の美しさを台無しにしてしまうほどの絶望的な表情を浮かべていた。

「なんだ友達十人って！ どんだけ友達いっぱい欲しいんだ私はああああ！」

一人反省会。それは、ボッチがまれに会話をした際に発生するレアイベントだ。

前提として、ボッチが会話をうまくこなせることなどほぼない。当然だろう。普段から人と会話していないのだ。急にうまく会話しようとしても、それは普段海を泳ぐ魚に地面を走れと言うようなものだ。

結果として、思い返してみればあまりにもひどい会話を繰り広げてしまう。言葉に詰まり、どもり、変なことを口走って、生温かい目を向けられる。

そしてボッチは、ふとした時にそれを鮮明に思い出す。歩いている時。シャワーを浴びている時。寝床についたとき。

そして、押入れで落ち着いた時。

それらの恥ずかしい記憶はまるで巣に近づいた不届き者を見たミツバチのように一気呵成に襲い掛かり、その刺すような痛みに思わず奇声を上げてしまうのだ。

「あああああああ！」

思えば、初対面の人とあんなに話せたのは初めてで、あんなに饒舌になったのも初めてだ。

おそらく、彼に対して親近感のようなものを持っていたのだろう。

ひとりは羞恥心の中でそう自己分析した。彼の容貌は、ひとりにとって比較的話しやすい相手だった。それでも、話す時には吐きそうなほど緊張したが。

「でも、あの人変な人だったなあ」

自分の奇行をいったん棚に上げて、ひとりは今日会話していた男子生徒のことを思い出していた。

比企谷八幡。濁った瞳。気だるげに曲げられた猫背。しかしその言葉からは、彼の中に存在する独自の思考のようなものが感じ取れた。

「まあ教室で眺めている時からボツチだなんて分かってはいたけど……」

自分以外にもボツチがいる。

そう思っただけ興味深く彼を観察するうちに、分かったことがある。

自分によく似ている。

けれど、何かが決定的に異なる。彼は、自分とは違って他人に怯えていない。どうしてだろう、と思っただけ、らしくもなくひとりは今日彼に話しかけてしまったのだ。

「思えば私、なんでもの時話しかけちゃったんだろう」

自分でもびっくりだ。もう一度やろうとしても、多分無理だ。

「どうか思い出すだけで無理だな……溶ける……」

へろへろへると、ひとりはその場に崩れ落ちた。

羞恥と恐怖の熱に、彼女の脆弱な体は耐えられなかったのだ。うねうねと、まるで軟体動物のように動きながら独り言を続けるひとり。

「でも、なんかこれからもよろしくみたいなことになっちゃったな……」

また話しかけなきゃ。……話してみたい。

「いや無理だっ……いくら相手がボツチだからってこれ以上話せないって……ていうかあの人が怖いし……」

なんでこれからよろしくお願ひしますみたいな空気出しちゃったんだろう。これじゃあ、これからクラスで話しかけないといけないじゃないか。ひとりの声をした軟体動物は、ひとりごちる。

「はあ……やっぱり友達は自分で作らないとなのかなあ。……ああ、学校辞めたいな」

ひよこひよここと、飛び出したピンク髪が揺れる。無意味に体を揺らす。

いつものネガティブな思想に囚われた時、彼女は今日かけられた言葉を思い出した。

『まあ、なんだ。俺で良ければ話くらいなら聞けるぞ』

す、と彼女は座り直した。寝転がって、自己嫌悪に浸るのをやめた。

「……ギター弾こう」

きっと彼女は、彼に言葉をかけられなくても同じ結論に辿り着けただろう。独りであることをどれだけ嘆いていても、彼女は一人で立てる。

ただ、そこに少しの助けが加わっただけだ。



「そうだ！ バンドマンっぽい恰好をしてバンド好きに話しかけてもらえばいいんだ！」

翌日、後藤ひとりの脳は閃いた。ギターの練習にのめり込み深夜まで起きていた彼女の頭は、だいぶ馬鹿になっていた。

「比企谷さんに頼らなくてもやれるってところを見せてやるんだ！ むしろ友達を彼に紹介するくらいになってやる！」

ひとりのバンドマンっぽい恰好には、やたらと気合が入っていた。有名バンドのTシャツ。腕にうざいほど巻き付けたリスト。バッグには所狭しとつけられた缶バッジ。トドメに、背中にはギターケース。誰がどう見ても完璧なバンド少女だ。

彼女の頭の中には、完璧なイメージが構築されていた。ひとり己の策の成功を信じて疑わなかった。

その日の学校で、ひとりは勢い良く教室のドアを開けた。扉がバンツという音をたて、クラスの視線が入り口に集まった。

「……」

しかし、スルー。明らかに異質な格好をしたひとりは、触れない方が良いものとして認識された。

「……あれ？ まあいつか」

まだ登校直後だ。焦らずとも時間はたっぷりある。

遠くから比企谷八幡が呆れたような顔でそれを見ていた。

少し時間が経つと視線が気になり、ジャージのチャックを上げる。派手な模様のバンドTシャツが隠れる。

すぐすぐとリストを外してバッグに詰め込む。傍らに鎮座する大きなギターケースだけは、どこにも隠すことができなかった。

自信に満ちていた顔がだんだん虚ろになっていき、やがてひとりはどんよりとした顔で机に突っ伏した。

なんで誰も話しかけてくれないんだろう……。

さつきまであんなに元気だったのに、今や見る影もない。浮かれていた朝とは別人のようだ。

涙を流さずに泣いていると、そんな彼女の前に立つ一つの影があった。

「お前……ヤバイな」

比企谷八幡は、もはや畏怖すら感じさせる口調でひとりに話しかけた。

「あい……っ？」

言語能力すら失ったようにひとりは無気力な声を出した。目の前にいる人間が誰かすら認識できていないようだ。

「どう考えても引かれてたぞっ？」

「ぐぼあっ！」

ひとりの体がびくんと大きく震えた。見間違いでなければ、彼女の口端からは血が垂れている。

彼女自身、薄々分かっていたことだ。深夜テンションが冷めたあたりから、あれ、これもしかしてやらかしたかなと思ってはいたのだ。

「あー、いや狙いは良かったと思うぞ？ 趣味のあう人間を見つけ出そうとするのは友達探しの定石だからな」

あんまりなひとりの様子に、彼にしても珍しく気づかわし気な声を
出す。

ちなみに彼自身も同じことを試したことはあるが、失敗している。
学校にこれ見よがしにプリキュアグッズを持って行ってもドン引き
されるだけだったのだ。

「うあ……気を遣われているのが分かる……」

ひとりは突っ伏したまま、額をテーブルにゴツゴツとぶつけ始め
た。そのリズムは一定で、まるでドラムでも叩いているようだった。

「ヘッドバンキング……見た目通りにロックだな。音楽やってんのか
？」

比企谷八幡渾身のギャグも、今のひとりには届かない。

どうしようコイツ、人の話聞かないタイプのボッチだ……。

「あ、あのっ、放課後……」

「え？」

額で机を叩きながら、ひとりはぼそぼそと話し始めた。

「い、一緒に来てください」

「……あ、ああ」

突然の誘いに、八幡は狼狽する。

放課後一緒に。そんなのまるで、青春を謳歌するリア充高校生みた
いだ。

しかし、目の前にいる少女はかなり可愛い。暗い顔や変な顔ばかり
しているので忘れがちだが、本来八幡が話そうとすればそれだけでど
もってしまうような相手だ。

「こ、公園で、今日の反省会と対策会をします。ボッチ脱出会議です」
色気の少しもない誘いだった。

俺は別にそんなにボッチを脱出したいとは思っていないんだが
……。そう思ったが、ずっと同じリズムで額を机に打ち付けているひ
とりが怖くて、口に出すことができなかった。



「あ！ ギターー！」

「……え？」

二人で公園に行ったことが、ひとりの、そして八幡の運命を変えた。孤独な二人は、バンド活動などという全く縁のなかったことに巻き込まれることになる。

転機

公園までトボトボと歩く後藤と一緒に歩く。隣あって歩くわけもなく、俺は彼女の後ろを歩く。微妙な距離感。友達未満の関係性は、ボッチ同士だからこそ形成されたものだろう。

昼間の公園には、ベンチに座る一人のサラリーマンがいる程度だった。ギターを背負った後藤は、それを一瞥するとブランコに無言で腰かけた。

「あの人も一人なのかなあ……」

急にぼそぼそと話し始めた後藤の視線を追うと、先ほど見かけた中年のサラリーマンがいた。少し俯いている姿は、落ち込んでいるように見えなくもない。

「きつと家に家族もなくて、帰ったら一人なんだ……一人……私と同じ……フフツ……」

なんか勝手に身の上話を妄想してる……。自分の世界に入ってしまったことは、後藤の癖のようだ。

これは俺の主観だが、ボッチは後藤のように想像力豊かな奴が多い。人が何を話すか、何を考えているか、どう思っているか深く考えてしまうからこそ、人間関係に臆病になったりする。

人の考えることがよくわかるならうまく人付き合いできるはずだろ、とツツコミが入りそうなところだが、人間関係を気楽にどんどん形成するのは、むしろ考えない方がうまくいくのではないかと思う。

つまりあれだ、ボッチの方が賢い、リア充は馬鹿つてことだな！

ケツ、馬鹿は馬鹿どもでつるんでればいいんだ！

ハッ、いかん。気づけば俺まで自分の世界に入っていた。いつの間にか後藤はなぜか頭を抱えている。

ボッチが二人集まっても会話が形成されず、自分の考え事に没頭するばかり。こいつらに友達ができない理由がなんとなく分かる惨状だ。

しかし、そんなまとまりのないボッチ脱出会議に突然の闖入者が現

れた。

「あー！ ギターー！」

突然声をかけてきたのは、黄色い髪をした元気そうな少女だった。「わ、私!?」

後藤は一瞬俺の方を確認したかと思うと、すぐに自分の背負っているギターを再認識して、驚きに顔を染めた。

「はあ……はあ……あのー！ じつは今困ってることがあって！ できれば聞いてほしいお願いなんだけど、でもどうしてもってわけじゃない……」

絶対めちやくちや困ってるじゃん。

後藤はそんな様子 of 彼女を見て、ひどく落ち着かない様子だった。できることなら助けてあげたい。でも、自分に何ができるのか分からない。そんな顔だ。

「だから、もしあなたさえ良ければ」

「……ヒッ」

グツと近づいて来た黄色髪の女の子を前にして、後藤は小さく悲鳴をあげたかと思うと、俺の影にささっと隠れた。目の前の明るそうな少女よりも、俺の後ろにいたほうがまだましだと思ったようだ。

しかし少女は、その程度では諦めなかった。

「その、あなたからもお願いしてもらえませんか？」

黄色髪の少女のくりんとした大きな瞳が俺を見つめる。よく見れば可愛らしい顔立ちの少女だ。少し鼓動が早くなる。

視線を逸らしながら、俺は後藤の代わりに答えを告げた。

「アツ、あのちよつとそういうの受け付けてないっていうかなんていうか。サーセン……ツス」

ダメだった。というか、ここにいるのはボツチ二人。どちらが受け答えしてもロクな答えを言うことができないことに変わりはない。変わった。た。

黄色髪の彼女は一瞬俺を呆然と見つめたかと思うと、すぐに俺の後ろにいる後藤の方に呼びかけ始めた。

「あ、あの、じつはライブしたんだけどギターの子が逃げちゃって……」

だからお願い！ 今日だけでも演奏してくれないかな？」

「えっ、あつ……」

「本当？　ありがとう！」

「う、うわっ……まだ何も言っただけ……」

後藤の言葉をどう勘違いしたのか、黄色髪の少女は後藤の腕をガツチリつかむと、勢い良く駆けだした。

「たっ、助けっ……！」

後藤が、俺に助けを求めるような目をしていて。少し、止めるべきか考える。

少し関わっただけだが、同じボツチのよしみだ。俺が多少強引に割り込めば、後藤を連れ去るくらいならできるかもしれない。

しかし、俺にはその行動が正解とは思えなかった。

……一見強引な誘いのように見えたが、後藤は本心ではどこか喜んでるように見えた。

もしかしたら見間違いかもしれない。わずかに光る瞳や、少し伸びた背中。それら些細な変化が、彼女の内心を反映しているように思えたのだ。

それに、彼女は誰かと音楽の話をしたいから学校にギターまで持ち込んだのだろう。あわよくばバンドをしたい、とすら思っているかもしれない。

「……俺も行っていいか」

「え？　あー、うん！」

自分の口から出た言葉にわずかに驚く。後藤のことを手助けできるかなんて分からない。ただ、ボツチが一人から二人になるだけ。

「比企谷さんも……来てくれるんですか？」

潤んだ後藤の瞳と目が合う。すぐに逸らされる目には、わずかな期待が混じっているようだった。

「ああ、行くよ。どこに行くか知らないけどな」



やってきたのは、下北沢。古着や演劇、そしてアートなどのサブカルチャーを発信し続けるおしゃれな若者の街だ。

つまり、ボッチとは対極にあるような場所だ。

「うう……知らない場所、怖い……」

「……いけ好かない街だな。気取った奴らが自己顕示欲を解放してる空気。淀んでいる」

「君、かっこいいこと言おうとしてるけど声震えてるよ?」

……しまった。リア充高校生とは格が違う大人のリア充共を目にして、俺の中の反骨心が牙をむいてしまった。

「もおー! 下北は慣れてくると良い場所なんだからね! いいから着いてきてー!」

「はっ、はい」

後藤は元気に言うと、俺の後ろにささつと隠れた。しかし黄色髪の少女は俺の体を回り込むように覗き込むと、後藤に話しかけた。

「私、伊地知虹夏って言うんだ。あなたは?」

「ご、後藤ひとりです」

「後藤さんかあ。あなたは?」

「ツス。比企谷ツス」

ボッチ二人の自己紹介はあんまりにもひどいものだったが、伊地知さんはあくまで明るい調子を崩さなかった。

「そっかあ、二人とも一年生かな?」

こくこくと二人して頷く。

「私は二年生だから、先輩だね。まあとはいっても別に遠慮とかいらないからね! バンドマンは自由奔放で大丈夫だよ!」

俺はバンドマンでもなんでもないんですが。しかし伊地知先輩はあくまでマイペースに話を続けた。

「今から行くのはSTARRYってライブハウスだね。私のお姉ちゃんも店長やってるんだあ」

「あっ、はい」

……まさかそんな陽キャの頂点みたいな場所に連れていかれるとは思ってもみなかった。今からでも後藤を引きずって去るべきだろ

うか。

ライブハウス。一度も入ったことがないが、俺のイメージは酒を片手にアホみたいに踊り狂う人々だ。陽キヤを通り越してパリピの集まりだと言えよう。

「そんな場所に後藤を連れて行くのか？ 大丈夫か？」

俺の後ろでふるふる震えている後藤が耐えられるとは思えないのだが。

「え？ でもギター担いでるくらいだから慣れてるでしょ？」

「えっ？ ……あつ、はい」

ああ、コイツ断れないタイプの陰キヤだ。明らかにノーの雰囲気を出しつつ肯定する後藤を見て、俺は確信した。

ちなみに俺は、断れるタイプのボツチだ。掃除当番を変わってくれと言われても断り、委員会に参加してくれと言われても断り、体育祭の練習を真面目にやってくれと言われても断り続けた。おい、これじゃただのダメ人間だろ。

「さあ着いた！ ……ここだよ！」

伊地知先輩が指さしたのは、地下へと続く階段だった。その先には簡素な作りのドアがある。

は、入りづらい……。普段行くようなカジユアルなチエーン店とは雰囲気が全く違う。アングラ、と形容すればいいだろうか。

しかし伊地知先輩は、まるで実家のように気楽な態度でドアを開けた。

ライブハウスに入ると、内部の雰囲気を感ずるまでもなくこちらに声をかけてくる影があった。

「やっと帰って来た」

「リョウ！」

現れたのは、中性的な雰囲気を纏った少女だった。短く揃った青髪。どこかぼんやりとした目。ユニセックスなファッションは、下北沢を歩いていても違和感がないほど独特で魅力的だ。

「ギターの子捕まえてきたよ！」

「え？ その目が死んでる男？ 大丈夫なの？」

出会って早々に罵倒された。わりといつものことなのであまり気にしない。

けれど、彼女は別に俺を馬鹿にしているというわけではなく、単に思ったままを口にしてしているような雰囲気だった。

「違う違う！ こっちのギター担いでる子に決まってるでしょ！」

「いや、そっちも目が死んでるんだけど」

どちらにせよ目が死んでいる。

「いいから、ライブに向けて合わせやろ？ もう時間ないでしょ？」

青髪の少女は小さく頷くと、自分の楽器を取りに行つた。話が早い。時間がなくて困っているらしい。

後藤はいぎ音を合わせるとなると怯えるものかと思っていたが、意外なことに自信に満ちた表情をしていた。

常に自信なさそうな態度の彼女だが、どうやら自分の音楽には自信を持っているらしい。音楽についてはほとんど知らない俺でも、それくらいは分かった。

なし崩し的にセッションの場に連れてこられてた俺は、周りをきよろきよろ見渡す。

ギターを持つ後藤と向き合うように、青髪の少女——山田リョウ先輩がベースを持ち、奥にいる伊地知先輩がドラムを構えている。

少しすると、即興バンドの演奏が始まった。

少しすると演奏が終わり、三人が楽器から顔を上げる。伊地知先輩

は真つ直ぐに後藤を見つめると、こう呟いた。

「ド下手だ……」

「……えっ？」

……うん、想像の数倍下手だった。

未だ彼はそれが何なのか知らない

「ド下手だ……」

思わず漏れた、という伊地知先輩の言葉に、後藤はガーン、という擬音がつきそうな顔をしていた。

「あれ……なんで……」

衝撃冷めやらぬ、という態度の後藤はいったん放置して、俺は伊地知先輩に話しかける。

「それで、どうするんですか？ やっぱライブ止めます？」

「え？ なんで？」

どうしてそんなことを言われたのか分からない、と言いたげに先輩は首をかしげた。

「いやだって、急遽連れてきたギターが下手だったんでしょ？」

「いや別に、下手でも大丈夫だよ？ 一生懸命なのは伝わってきたし！ ていうかうちのバンドの演奏、私の友達くらいしか見に来ないからね！ 普通の女子高生に演奏の良し悪しなんて分からないって！」
観客が聞いたら大ブーイングが起こりそうな言葉だった。

しかし伊地知先輩は、初めて出会った後藤にもある程度の優しさをもって接してくれているようだった。

こういう人は貴重だ。陰キャと見れば難癖つけて迫害してくるような人間ばかりだからな。後藤は良い人との接点を持ったようだ。

俺が伊地知先輩とそんな会話をしていると、後藤はなぜか地べたに横たわっていた。

「どうも、プランクトン後藤です……」

「売れない芸人みたいなの出てきた！」

落ち込み方が独特すぎる……。

しかし後藤的には本気で落ち込んでいるらしく、のそのそとゴミ箱の中に入って出てこなくなってしまう。……というか、女子高生がゴミ箱になんか入るな。汚かったらどうするんだ。

「お願い、出てきてよー！ ライブ始まっちゃうよー！」

「む、無理です……！ やっぱライブなんてできないですよ！ 演

奏下手だし、MCできないし……そうだ、私がギターでハラキリ
ショーすれば名前くらいは覚えてもらえますかね？」

「ド下手ですいませんッ！ と腹を切る後藤の姿が幻視された。
「悪い意味で覚えられるだけだろ……」

それこそ、売れない芸人の一発ギャグみたいなものだ。バンドのこ
とは覚えられず、後藤の奇行だけが記憶されることだろう。

その後も彼女らは何回か問答をしたが、後藤はなかなかゴミ箱から
出てくることはなかった。伊地知先輩の顔にも、わずかに焦りが見え
る。山田先輩は……相変わらず何考えてるか分からない。

黙ってそれを眺めていた俺は、タイミングを見計らって口を開い
た。

「なあ後藤。このままゴミ箱に籠ったままだったら、何が起こると思
う？」

「えっ？ その、ライブにでなくて済む……？」

おずおずとゴミ箱から顔を出しながら、後藤は答えた。目線はひよ
こひよことせわしなく動き、質問の真意を考えているようだった。

「そうだな。それでその後、家に帰って何を考える？」

「さ、最初は安心して……でもその後ライブのことを思い出して、逃げ
出したこと思い出して……後悔して……」

ぴた、と後藤の動きが止まった。

しばらくして、ゴミ箱がまるで壊れた洗濯機のようにガタガタッ！
っと動き始めた。

「あばばばばばばばばばばー！」

ゴミ箱が暴れ狂う。横に倒れても関係ない。まるで高速で走る車
のタイヤのように、ゴミ箱はゴロゴロと転がり始めた。

「ひとりちゃん!？」

「おお、これはロック」

ロックなんでもありだな。

ゴミ箱はしばらく部屋の中をゴロゴロと転がり続けていたが、やが
て体力が尽きたのか動きを止めた。

「はあ……はあ……や、やっぱり後悔するのはいやです」

「結局何の話してたんだっけ？」

倒れたゴミ箱の中から顔を出した後藤が意を決したように言ったが、伊地知先輩はもはや何の話をしていたのか覚えていなかった。あんなシヨツキングな光景を見せられたら当然だろう。

「で、でもやつぱりいきなりライブは怖いです……」

「じゃあ、これに入ってやれば？」

山田先輩が持ってきたのは、大きな段ボールだった。表面に「完熟マンゴー」と書かれている。後藤はそれを受け取ると、その中にすっぽりと入った。

「お、おおー、家と似ていて安心します」

「どんな家住んでんの？」

ゴミ箱に籠ったのも、狭い所が好きだからだろうか。

……まあ、ポツチ的に気持ちはわかる。狭い所、暗いところとはすなわち人がいないところ、人の視線がないところだ。普段人とするまないポツチにとって、ホームとすら呼べよう。

「み、皆さん、下北盛り上げていきましょー！」

「急に元気になった……」

ガタゴトと動く段ボール。喋る段ボール相手に観客は盛り上がるだろうか……。

「そういえばひとりちゃんやんはライブの時どんな名前でも呼べばいい？あだ名とかある？」

「ちゅ、中学ではおい、とかあの、とか呼ばれてました」

「それあだ名じゃない……」

段ボールからのぞいた後藤の目は死んでいた。

「じゃあなんて呼ぼうか」

「陰キヤに安易なあだ名をつけるのは危険ですよ」

「知っているのか、比企谷」

山田先輩の声に応えるように、俺は前に出た。

「例えば陰キヤにフレンドリーな名前をつけたとしましょう。『はっちゃん』とかそういうやつです。でも、呼ばれても無愛想で返事しないとかだとどうなると思います？ 呼び方のカジュアルさに対して

キャラがあつてなくて、やがて『はっちゃん……さん……?』とか遠慮して呼ばれます。そうになると、惨めさだけが先行して逆に疎遠な感じになります」

「嫌なりアルさだね……」

伊地知先輩は呆れたように俺を見ていたが、後藤は静かにコクコクとうなづいていた。

「距離を詰めるっていうのは伊地知先輩みたいな人にとっては簡単なことかもしれませんが、陰キャ、特にボツチにとっては困難で危険なことなんです」

「な、なるほど……あだ名つけるのも慎重にしないとだね……」

「ひとり……ボツチ……ぼっちちゃんはどう?」

しかし俺たちの会話をボーッと眺めていた山田先輩が、一瞬であだ名を決めてしまった。……この人、空気が読めないっていうか読まない人だな。

「またデリケートなところを……!」

「あ、あだ名……! はい、ぼっちです!」

段ボールから顔を出した後藤は、煌めくような笑顔だった。

「それでいいのか……?」



結束バンドの初ライブを、俺は最後列で聴いていた。ライブハウス。初めて来たが、思っていたよりは居心地のよい場所だった。腹に響くような激しい音。音楽に乗る観客。熱狂を後ろで眺めていた俺は、それらすべてがよく感じられた。

肝心の後藤たちの演奏は、お世辞にもうまいとは言えなかっただろう。素人の俺から見ても、音がバラバラだった。それでも、伊地知先輩の言う通り楽しく演奏しているのが伝わってきた。……段ボールの中にいた後藤がどんな表情をしているのかは、よく分からなかったが。

結束バンドの打ち上げを華麗に回避した後藤は、そのまま帰路につ

くようだった。

俺は彼女とは少し時間をずらして帰ろうかと思ったが、少し話しておきたいことがあったので、夜の下北沢に出た後藤を追いかけやがて並び立った。

「後藤」

「あ、比企谷さん。ライブ見てくれてたんですね。ありがとうございます」

後藤がお辞儀するように小さく首を下げた。

「別に感謝されるようなことじゃないだろ」

俺がやりたくてやったことだ。

後藤は少し首をかしげると、前を向いて歩き始めた。それをいいことに、俺はそっぽを向いたまま彼女に話しかけた。

「——正直言って、俺は最初バンドなんて陽キャのやることだって馬鹿にしてたんだ。友情ごっここの延長。モテるためにやってるだけ。そう決めつけて、見ようとしなかった」

多分、俺がひねくれているからそう思っただけなのだろう。

でも、今日は少し認識を改められた。

「ただ、お前たちは違うんだろうなって思った」

こんなのは、俺の単なる思い込みかもしれない。もしかしたら結束バンドは数か月も持たずに解散して、彼女らは何もなかったかのよう
に青春を謳歌しだすのかもしれない。それでも。

彼女たちなら、俺の焦がれた「何か」になれるかもしれない。

「……それだけだ。陰ながら応援くらいするから、まあせいぜいバンド活動励めよ」

自分の言いたいことが結局分からなくなり、俺は適当に言葉を締め
てその場を去ろうとした。全く、これじゃ俺のコミュ力は後藤以下
だ。

でもきつと、俺が彼女と関わるのもこれが最後だ。後藤ひとりな
ら、そしてあの優しい先輩たちがいれば、結束バンドはうまくやれる
のだろう。

「ま、待って、ください」

しかし後藤の震える言葉が聞こえるのと同時、俺の襟がぎゅう、と締まった。

「ぐえっ」

「あ、すいませんすいません！」

後藤に後ろから襟をつかまれた俺は、危うく自分の服に絞殺されるところだった。

「で、でも。ここで止めなかったらなんかそのまま二度と関わらない雰囲気だったので……」

「なんでそんなこと分かったんだ？」

「わ、私、ぼっちなので……！」

彼女は、今日つけられたあだ名を誇らしげに語った。

「あ、明日からも、一緒にSTARRYに来てください……！」

「……俺がいたって何もできないぞ」

音楽なんてからっきしだし、バンドについては何も知らない。

「で、でも、私には必要なんです……！」

彼女がどういう意味でそう言ったのは分からない。単に同族を見て親近感が湧いたのか、陰キヤが一人じゃ心細かったのか、あるいは別の何かがあったのか。

——けれどそれは、俺にとって存外心地よいことだった。

「……ああ、分かったよ」

せっかく間近で見せてくれるというのなら、存分に見届けよう。後藤ひとりの、そして結束バンドの行く末を。

ボツチの過去語りは長くて陰鬱

比企谷家の朝は緩やかな空気が流れている。両親ともに朝早くから出掛けてしまうため、登校する頃に残っているのは俺と妹の小町だけ。

「小町、おい起きろ。ソファで寝るな。遅刻するぞ」

「んあ……？ あれお兄ちゃん？ ラスボスを前に決死の特攻を決めて、親指立てながら溶鉱炉に沈んでいったはずじゃ……」

どんな夢見てんだよ。

寝ぼけ眼で俺を見上げていた小町は、やがて立ち上がると朝食の準備を始めた。俺もそれに倣う。

そして、質素な朝食が出来上がった。食パン一枚と牛乳。お互いにめんどくさい調理工程を嫌った結果だ。

パンをカリカリと食べながら、小町は俺に話しかけてきた。

「いやあ、でもお兄ちゃんが遠くの高校なんて選ばなければもつとゆっくりできたのにねえ」

「別に小町も一緒に出る必要ないぞ」

東京に位置する秀華高校までは、千葉から電車で一時間半かかる。そのため俺の朝はいつも早い。

絶対に誰も中学までの俺を知らない場所に行つてやる、と考えた結果少々遠くまで行きすぎたかもしれない。もつとも、俺の努力虚しく高校でもボツチなのだが。

「ええー、送つてよ。可愛い妹をチャリの後ろに乗せられることに感謝とかないの？」

「乗せてもらってるのに凶々しいなお前……」

最寄り駅までは自転車で向かっているので、そんな俺を小町はよく足代わりに使っている。

「でも、高校入ってからお兄ちゃん意外と楽しそうで安心した」

意外な言葉に、俺は思わず顔を上げた。その先には、ニマニマという笑顔を浮かべた妹の姿。

「……そうか？」

「そうだよ！前はいつとも学校だりい、なんでこんな遠いんだーって愚痴吐いてたのに、最近あんまり聞かないし。あんまり気持ち悪い笑い方しなくなつたし。独りの時に急に笑いだすの、小町正直怖かったんだからね！」

妹に怖がられていたという新事実を知ってしまった俺は、結構なショックを受けた。マジか……自分では全然気づかなかつた……。

それについては反面教師というか、あいつに感謝するべきかもしれない。後藤ひとり。よく気持ち悪い笑いを漏らしているボツチだ。

「まああれだな。少しのことにも、先達はあらまほしきことなり、という言葉の通り、ボツチはボツチであるがゆえに己の客観視が難しい。完璧にして唯一無二の存在であるボツチにも欠点はあったということだな。玉に瑕とはまさにこのことだ」

「お兄ちゃん何言つてんの？ 気持ち悪」

俺が古文の教養を交えたトークを展開したというのに、小町は気持ち悪、の一言だけで受け流してしまった。

「まあでもあれだね。お兄ちゃんにボツチ仲間ができたっていうなら小町は安心です。なんていうの、同じ穴のムスカ？」

「ムジナ、な。ムしかあってねえじゃねえか」

常に「見る、人がゴミのようだ！」のテンションで人を見下して生きてるので、あながち間違いないのかもしれない。

「ボツチが全部同じ穴のムジナかと言われると難しいところだけだな。特に俺とあいつはだいぶ違う」

「へえ、何が違うって？」

俺が他の特定個人のことを話題にあげるのが珍しかったのか、小町が顔を上げる。

しかし俺は、言葉に出そうとしたところで存外彼女についてよく知らないことに気づいた。

「……まあ、いろいろだ」

「ええー、何それ」

正直、俺にもよくわからない。

◇

下北沢の街中の雰囲気は、いつ来ても慣れない。

駅を降りた直後からの人混み。その質は、大都会東京の中でも少し異質だ。

洒落ている、とでもいえばいいのか。纏う服装や、髪の色などからそんな雰囲気を感じ取ると、つつい委縮して、まるで異物である自分が見られているような錯覚に陥ってしまう。

……もつとも。

「おい後藤。いい加減離れろ。視線が痛い」

「むっ、むむ無理です！ 怖いです！ みんなの目が痛いです！」

「お前がくつついついてるから見られてるんだろうが！」

今の俺は、間違いなく異物だった。

俺と一緒にいる後藤が肩を掴み、まるで背後霊のように俺の後ろにピタリとくつついついてきている。二人密着して歩く姿は、ひどく目立っていた。

「こつ、こんなおしゃれな街歩いてるだけで恥ずかしくつてとても……」

「どう考えても今の格好の方が恥ずかしいだろ！ めちゃくちゃ見られてるって！」

何を街のど真ん中でふざけているのだろうか、という目。奇行を眺める目。それから、カップルのじゃれあいを生暖かい目で見守る目。

……おい、最後のはひどい勘違いだぞ。

しかし、この状況にこんなでも女の子なんだなとついつい意識してしまう。

後藤の方からふんわりと良い匂いがする。肩に当たっている手は柔らかくて、自分の固い体との差を実感して緊張してしまう。

人の目を感じながら、STARRYへ。正直この店の独特の雰囲気は少し怖く、ドアを開けるのも躊躇ったほどだが、後ろで小動物のようにはびるぶると震えている後藤を見ると、怖がっていることも馬鹿馬鹿しく思えてきた。

ドアを開けると、先輩二人は既に中で待っていた。

「遅いよ二人とも」

「すみません。後藤を引きずるのが思ったより大変で」

「君たちどうやってきたの!？」

気分的には砂袋をいっぱい詰めたキャリーケースを引きずっているような思いだった。

「何はともあれ、さっそく結束バンドで交流を深めていこう！ イエー！」

「いえー」

「あつ、はい」

「……」

うら若い少女たちの声がライブハウスに響く。

今さらだが俺はここにいっているのだろうか。そう思っていると、伊地知先輩にじとつとした目を向けられた。

「比企谷君、ちよつとノリ悪くない？ あのぼっちちゃんですら頑張つてノリについていこうとしたのに」

ちよつと聞くと俺が責められているようだったが、よく考えれば後藤がけなされている気がする言葉だった。

「いや、あまりに場違いっていうか、楽器の一つも引けない俺がここにいていいのかと今更思いました」

「別にそんな細かいことどうでもいいと思うけど……じゃあボーカルやる？ 歌っちゃおう？」

歌、と言われると俺は急に過去のことを思い出した。

「俺が歌う……？ フツ、絶対に無理ですね」

そこで言葉を切った俺は、遠くに視線を漂わせた。

「——あれは小学生の頃、合唱練習でのことです」

「なんか急に始まったんだけど……」

「比企谷、目がいつもの三割増しで腐り出した」

ほつといってください。

「クラスで課題曲を発表するために、五年一組は毎日放課後に練習していました」

「ああー、あったね合唱祭みたいなの」

「合唱祭……うっ……」

後藤がうめいているのは、たぶん俺と似たような経験があるからだろう。

「練習は連日白熱していました。クラス委員長の女の子が張り切って指揮を執っていたからです。前に立ってみんなを指揮する姿は、まさしく委員長でした——しかし、事件は起きたのです」

俺が声をひそめて言うのと、後藤と伊地知先輩はごくりと息をのんだ。山田先輩は……興味なさそうだ。視線がどこかをふよふよとさまよっている。

「委員長の女の子はある日言ったのです。『もういや、男子がちやんとやってくれない！ 私帰る！』」

やたらと力のこもった俺の言葉に、一瞬ライブハウスに沈黙が下りた。

ややして。

「……きや、きやあああああああ！」

「どうしたぼっちちゃん!？」

がたがたと震えた後藤が突然椅子から崩れ落ちた。よく見れば、その口端からはブクブクと泡が噴き出ている。

「ぼっちちゃん、ぼっちちゃん！」

地べたに倒れ込んだ彼女に伊地知先輩が呼びかけるが、返事はない。びくびくと体を痙攣させる後藤は、ともすれば死にかけているようですらあった。

「そうして、クラスの中では犯人探しが始まりました」

「まだ続けるの!？」

「お前声小さかったから謝りに行けよ。いや、お前が。などと醜い戦いが繰り広げられたのち、多数決社会は生贄を見つけ出しました。——そう、ボッチです」

後藤の体が、ぶるぶるとひととき大きく震え出した。まるで極寒の雪山に軽装で放り投げられたような有様だ。

「比企谷の声が小さかった。比企谷は歌ってない。ていうか下手。歌

わない方がいい。放課後長時間合唱練習をさせられているストレスまで一緒にぶつけられた彼は、その後委員長ちゃんに一人で謝りにいったとき」

「ぼぼぼぼ……」

後藤の口から出る泡の量が増えた。……あいつの体どうなってるんだ。

伊地知先輩は、いたわるように後藤の背中を擦っていた。

「ぼっちちゃん……ぼっちちゃんもあんな風に嫌な思い出があるの？」

「いや、さすがにあそこまでの鬱エピソードはないんですが……ただ嫌な空気になったのは一緒に、全然声を出してなかったのが気まずくて……」

その時を思い出したのか、後藤の視線はどこか遠くを彷徨っていた。

STARRYに微妙な沈黙が下りる。伊地知先輩は気まずそうに眼を逸らすと、どこからともなくサイコロを取り出した。平日お昼にやっているテレビ番組を彷彿とさせるそれには、トークテーマが書かれていて、中にはなぜか『バンジージャンプ』が紛れ込んでいた。

ああ、先輩たちなりにどうやって仲良くなるか考えてたんだな。なんか俺のポッチトークで色々ぶち壊してしまった気がする。少し申し訳ない。

初バイトのぼっち

サイコロを利用したトークは、後藤がいかにもヤバイボツチかを露呈させて進んでいった。

ちなみに俺は、さっきのエピソードでドン引きされたのを反省して少し黙っていた。

俺は空気が読めるボツチなのである。おい、本当に空気が読めたらボツチやってないだろ。

「——そういうわけでぼっちちゃん。バイト、しよ」

その言葉を聞いた瞬間、後藤はきよとん、とした表情をしていた。

「……ぼっちちゃん？」

「——バイトっ!？」

「うわっ、ぼっちちゃん今日一声出たね」

後藤の顔はまるで世界の終わりに直面したようだった。

けれどそれも仕方ないことだろう。

バイト。それはボツチにとつてあまりにも苦行といえるものだろう。

「ぼっちとバイトは相性悪いですよ。俺なんて高校入って初めてやったバイトは一か月経たずにバックレましたから」

「それは比企谷君がクズなだけじゃないかな？」

「グッ……伊地知先輩って意外と口悪いですね」

わりと思っただ通りをそのまま口にする人なんだろうか。

さて、後藤はどうするのだろうか。と思つて彼女を見る。すると、その手元には豚の形をした貯金箱が鎮座していた。

「これは？」

「あつ、あのお母さんが私が結婚した時のために貯金してくれて……これでバイトは勘弁してください!」

「そんな大事なお金受け取れないよ!」

伊地知先輩はビツクリしながら拒絶していたが、山田先輩は真顔で貯金箱に手を伸ばしていた。

「ありがたく、いただきます」

「いただかない、いただかない」

山田先輩の伸ばした手をパチツと叩く伊地知先輩。

「ぼ、バイト……目が合わない……炎上……死刑……」

ブツブツ呟く後藤の目がぐるぐると回っている。コイツはいったい何を考えているのだろうか。

「ぼっちちゃん！ 大丈夫。ここで私たちと一緒に働こー！」

「私たちもサポートするから安心していい」

「みんな……」

相変わらず、後藤は人間関係に恵まれたな。そんなことをボーッと考えながら聞いていたら、いつの間にか矛先が俺に向いていた。

「じゃあ比企谷君も、ぼっちちゃんのフォローよろしくね」

「え？ ……俺ですか!?!」

伊地知先輩たちがどうにかするものだと思ってたから、すつかり気を抜いていた。

「いやでもさつき言ったように俺バイトした経験ほぼないですよ？」

何もフォローできないっていうか……」

「でもぼっちちゃんよりはマシでしょ」

何を根拠に……？

なおも反論しようとした俺だったが、チラと後藤の様子を確認して口を閉じた。

伏せがちな瞳は確かに俺を捉えていて、様子を伺っていた。

バイト先にポツチ仲間が欲しい。そう語っているようだった。

「……わかりましたよ」

結束バンドの活躍を見たいと願ったのは俺だ。願われるなら、こういう方法で関わるのも悪くないだろう。

ホツとしたような表情を見せた後藤を横目に見て、俺はそんなことを思っていた。

STARRYから出た後に、俺と後藤は並び立って歩いていた。しかしお互いに無言だ。

沈黙に耐えかねて、というわけでもないが、俺は後藤に話しかけた。
「なあお前、バイトさぼろうとしてるだろ」

俺の言葉を聞いた瞬間、後藤はピタツと立ち止まった。ぎこちなく、錆びた機械のような所作でこちらを向く。その顔は、冷や汗がダラダラと流れている。

「ソ、そんなことないですよ」

「じゃあお前、バイト前日に何する？」

「えっとそれは、氷をいっぱい買って、お風呂に浮かべて、20分くらい入って、あとは扇風機で……」

「風邪ひいてサボるとか小学生の発想だな」

「グハツ……」

後藤は胸を抑えると、ガクツと倒れ込んだ。夜道に一人倒れ込む後藤の姿はあまりにも奇怪だったが、本人は気にしている様子はない。

「分かってるんですよ……最低な発想だなんて……でも、怖くて……」
言葉には、存外深刻な響きがあった。どうやら彼女なりに悩んでいるようだ。

「まあ一日くらい休んだからって別に怒られはしらないと思うぞ。ただ、俺の経験から一つ言えることがある」

「……そ、それは？」

「バイトの初日をサボると、そのあと行きづらくなって結局行かなくなる」

「あ、ありそう……」

「というか、あった。最初のバイトを二週間でやめて、その後のバイトは初日バックレてそのまま行かなかった。」

「後藤は、先輩たちのこと嫌いじゃないんだろ？」

「そ、そうですね……好きです」

ああ、そう言いきれぬのなら、俺がとやかに言うまでもなかったかもしれない。

「前も言ったと思うけど、後悔しない方を選んだ方がいいと思うぞ」

きつと彼女は俺と同じ、考えすぎてしまう人間だ。だから、バイトをサボった彼女が何を考えるのかはなんとなく分かる。

「……はい」

そして来るバイト当日、後藤は普通に学校にきていた。

放課後、どちらともなく連れ たつてSTARRYへ。

下北沢に着いてから、後藤はずっと挙動不審だった。……いや、いつも挙動不審と言えばその通りだが、いつも以上にびくびくしている。そんなにバイトが怖いんだろうか。

「なあお前、大丈夫か？」

「だ、ただ大丈夫ですよっ、そう、私はできるぼっち。颯爽と接客をこなし、こなし……お客さんの前で固まって……」

後藤がピタリと立ち止まる。ああまずい。これは自分の世界に入り込んでしばらく帰ってこないやつだ。

「あああ、撮影、拡散、炎上、死刑……!」

「おい、戻ってこい。バイト遅れるぞ」

頭を抱えながらその場で立ち止まる後藤に、なすすべもなく立ち尽くす俺。

……まずいな。このままだと当初のバイト時間に間に合わない。そうなると後藤がバイトにいかない口実ができてしまう。

「ほら、行くぞ」

やや迷ったのち、俺は後藤の手をがっしりと掴みバイト先へと歩き出した。

意識しないようにしているのに、後藤の手の感触が伝わってくる。柔らかくて、自分の手とは比べ物にならないほどすべすべしている。

「ああ……バイト……炎上……不快にした罪……」

しかし、後藤は俺と手を繋いでいる状況にすら気づいていないようだった。空を向きブツブツ呟く彼女。シチュエーションはそこそこロマンチックなのに、とても男女交際なんて意識できないようなひどい有様だ。

結局のところ俺は、STARRYの中に入るまでずっと後藤と手を繋いだままだった。

「あ、ぼっちちゃん来た……ってええ！　なんで二人手繋いでるの!？」
入ってきた俺たちを見て最初に叫んだのは伊地知先輩だった。

「虹夏、気づかなかったの？　二人はもうずっと付き合っていて、深い絆で結ばれているんだよ」

「ええー!?　そうだったの比企谷君!」

山田先輩の適当な冗談に伊地知先輩がのっかてしまった。

「いやいや、そんなわけないでしょ。というか今の後藤の顔を見てく
ださいよ、どう考えても彼氏と一緒に歩いてきたって感じじゃないで
しょ」

後藤を指さす。彼女は天を向き虚ろな目をしていて、端的に言えば
ゾンビのようだった。

「シケイ、シケイ……」

「確かに……」

そんな風の後藤の話をしていたが、彼女自身はまったくそれに気づ
いていないようだった。

「じゃあ比企谷君は、ぼっちちゃんどう思ってるの?」

「どうって……」

「短い間接しただけだけど、比企谷君って結構ぼっちちゃんのことよ
く見てるでしょ。だから、好きなのかなあって」

「……ハハッ、それはないですね」

少しだけ考えるが、やはりない。

「でも、比企谷とぼっちは案外お似合いなんじゃない?　なんか似て
るし」

山田先輩まで面白がったのってしまったので、俺ははっきりと否定
することにした。

「それはないですね。まず、高校生の男女交際なんてものにどれほど
価値がありますか?」

「……え?」

「恋愛なんて突き詰めれば子孫を残すための本能的な行動です。しか
し高校生カップルが子どもを作る余裕なんてあるはずもなく、そして
結婚まで至る例もほとんどありません」

「あ、あの……」

「言ってしまうばお遊びなんですよ。それなのに男女交際や接吻の経験がまるで男の勲章であるように持て囃され、ステータスとして扱われている現状には疑問を覚えます」

「いや、そういう……」

「そのことから、俺が高校生の男女交際なんていう紛い物みたいな関係性を構築することはまずありえないと言えるでしょう。分かりましたか？」

完璧な論理だ、と思つて満を持して伊地知先輩の顔を見るが、彼女は全く分かつていないような表情をしていた。

「全然分かんないよ！ 比企谷君何言つてんの!？」

「比企谷、ぼつちが自分の世界に入つてる時みたいだったよ」

「えっ、それはすいません」

後藤と似ていた、と言われて俺は素直に反省した。それはあんまりだと思つたからだ。

ボーカル探し

後藤の初バイトが始まった。

お客がたくさん入ってきたSTARRYで、俺と伊地知先輩、それと後藤は、カウンターに立って飲料の販売を行っていた。

「ぼっちちゃん、コーラ一つ」

「あつ、はい」

カウンターテーブルの下に隠れた後藤が、カップを置く。下から手だけが伸びてきてカップを置く姿は、客から見ればある種のホラーだろう。

「烏龍茶を……」

「あつ、はい」

どん、と烏龍茶がおかれる。後藤はカウンターの下にいるままだ。

「ぼっちちゃん！ お客さんに失礼でしょ！」

伊地知先輩が怒る。わりと寛容な彼女だが、接客に関してはそこそこ厳しかった。

「比企谷君も手伝って！ ぼっちちゃん結構アレだから！」

「アレ……」

落ち込む後藤を尻目に、俺は飲料をカップにそそぐ。そしてそれを客の前に置いた。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

小さく礼を言い去っていく女性客。

「比企谷君……ぼっちちゃんほど悪くはないんだけどなんか愛想ないよねー、もっとテンション上げれる？」

「ライブハウスのダークな雰囲気にはこれくらいが合うんじゃないですか？」

「バイト初日で雰囲気語るか……」

呆れたように言う伊地知先輩だったが、俺的には頑張ったつもりだ。だから今日はこれで勘弁してください。

しばらく接客をしていると、やがてバンドの演奏が始まった。STARRYの客入りは上々だ。ステージの周囲には盛り上がる人たちが集い、異様な熱気を発している。

照明に照らされるバンドマンを、伊地知先輩は眩しそうに眺めていた。

やがて彼女は、静かな口調で自らのSTARRYにかける想いを語った。自らの姉が自分のために作ってくれたこと。そして自身もこの場所が大好きなこと。訪れた人みんなに、この場所を好きになってほしいこと。

「——だからさ、ぼっちちゃんと比企谷君にも、STARRYがいい箱だったなって思って欲しいんだよ」

バンドマンに当たる照明が、カウンターに立つ伊地知先輩をわずかに照らす。

その言葉には、簡潔ながら深い、深い感情が籠められているようだった。自分の宝物を自慢気に話すような、我が子を慈しむ母親のような、幼いようで、けれど大人びた顔だ。

「……STARRYは、伊地知先輩にとって大切な場所なんですわね」「うん！」

ああ、そんなにも大切なものがあるなんて、少しうらやましい。らしくもない感傷を胸にしまい、俺は後藤の顔を少し見た。彼女もまた、伊地知先輩の言葉を噛み締めているようだった。

その後に見せた彼女のちっぽけな勇氣は……まあ、彼女にしては頑張ったと言える。

こうして、後藤の初バイトはなんとか無事に終わった。



同じ学校、同じクラスの俺と後藤は、時々一緒に昼食を取るようになっていた。別に仲良くなったらかそういうことじゃない。大抵は、バイトのこと、バンドのことについて何か話すことがある時に俺

の方から声をかけている。

「ああああの、いいいいつしよにご飯たたた、たべましえんつか?!」
今日は珍しく後藤の方から声をかけてきた。めちやくちやどもつていたが、辛うじて昼食と一緒に食べようと言っていることだけは伝わってきた。

そういうわけで、俺はいつしか後藤と衝突した場所、階段下のデッドスペースに来ていた。

「ボーカルを探してる? ああ、前そんな話してたな」

「は、はい。虹夏ちゃんは、元々逃げたギターの子が歌うはずだったって言ってるんですけど……」

もそもそとおにぎりを食べながら言う後藤。口を小さく開けて食べる姿は、小動物を彷彿とさせる。

その言葉を聞きながら、俺は惣菜パンを齧った。

昼休みにも関わらず、ここは静かだ。人氣がなく喧騒も遠いこの場所は、ぼっちにとって非常に居心地の良いところだった。

「しかしバンドで歌う気概のあるやつなんてそんな簡単に見つからないだろ。それに人格的にバンドと合わないダメなんだろう?」

「そ、それは確かに……」

そんな風に話していると、突然廊下に話し声が聞こえてきた。二人、あるいは三人だろうか。女子生徒の軽く弾んだ声は、よく響く。「ごめん喜多ちゃん、来週の日曜日、またバスケット部の助っ人頼んでいい?」

「ええー、また? まあでもいいよ」

「やった! さすが喜多ちゃん!」

チツ、リア充が。

……おっと、ついつい日頃の恨みが出てしまった。笑顔で会話する彼女たちは、俺が敵視してやまない宿敵、リア充のようだった。

「——でも喜多ちゃんバンドでギターボーカルまでやってたんでしょ? 本当になんでもできるね!」

「あつはは……もうやめちやっただけどね」

ボーカル。その言葉に後藤はピクリと反応した。

……というかお前、机の上に乗っかって盗み聞きするのやめろ。危ないだろ。

二段に積み重なった机の上に器用に座り込み、後藤は生徒たちの様子を観察していた。

「見つかったな。ボーカル候補」

女子生徒たちが立ち去ったので後藤に話しかけるが、彼女はなぜか頭を抱えたまま黙っていた。

「運動ができて、歌えて、ギターも弾けて、友達もいる……？」

後藤の体が震え出す。自らが発した言葉の恐ろしさに戦慄するよ
うに。

「ああああ、アイデンティティがあああああ！」

どこからか聞こえる『パチンツ』という何かが弾ける音。

己の誇りとするところ——ギターを弾けることに加えて他のこと
まで完璧にこなす喜多という生徒の姿に、後藤の中で何かが弾けたら
しい。

「……まあなんだ。俺は詳しくないが、ぼつちにしか出せない音みた
いなものもあるんじゃないか」

地面に横たわってぶるぶると震える後藤があまりにも哀れで、俺は
慣れない慰めの言葉をかけた。しかし彼女の意識はすでにどこかに
飛んでいってしまったらしく、俺の言葉を聞いている様子すらない。

……まあ、こいつが自分の世界に入って出てこなくなるのなんてい
つものことじゃないか。だんだんと後藤の扱い方がわかってきた俺
は、彼女を放置して昼食を食べるのを再開した。

廊下に膝をつき、教室の後ろのドアからそつと顔を出して中を伺う
後藤。あまりに不審者然とした態度に止めようかとも思ったが、彼女
なりに中に入るタイミングを見計らっているらしいので放置する。

彼女が観察しているのは、同級生に喜多ちゃん、と呼ばれていた女
子生徒だ。しかし俺が観察していても、後藤は一向に中に入っていこ
うとしない。いい加減声をかけようとしたところで、中から声がし
た。

「えっと、二組の後藤さんだよ。何してるの？」

「えっ、あつ」

突然喜多に話しかけられた後藤は、絵に描いたような動揺を見せていた。それでも、彼女はなんとか言葉を紡ぎ出す。

震える足で。震える唇で。なけなしの勇気を振り絞って。

「バツ、ギツ、ボツ！」

……おい、何一つ伝わってないぞ。後藤の発した言葉は、どもりを通り越してヒューマンビートボックスのようだ。

けれども喜多、という生徒は、困惑しながらも返答してくれた。

「えっと、ぶーつくばーつくー！」

……可愛い。さすが陽キャ。恨みも忘れて一瞬見惚れてしまったぜ。

しかし後藤は、目の前の少女がとりあえずヒューマンビートボックスらしい返しをしてくれたことすら認識できていないようだった。

「すすす……すいませんんんん！」

ピュー、とその場を去ってしまう後藤。後に残ったのは、結局何が起こったのか分からず困惑した顔で固まった喜多だけだった。

後藤が去ったのを見送った喜多は、ようやく俺の存在に気づいていたようだ。こちらを見た喜多は、やや困惑しながら話しかけてきた。

「あ、あの……どちら様ですか？」

おい！ 後藤の名前は知ってたのになんで同じクラスの俺の名前は分からないんだよ！

「あつ、比企谷ツス」

頭の中では憤っていたが、言葉はあまりにも気弱だった。

仕方ないのだ。陽キャの前では、陰キャは話しかけられただけでビビる。心中ではどれほど勇ましくても、劣等感ですぐ卑屈になってしまいのだ。だから俺は情けなくない。これはぼっちの習性だ。

「さっきの後藤さんの知り合いだよ？ 何の用だったのか聞いてない？」

「あー、直接聞いたほうがいいっすね。多分後藤の逃げた先は分かるので、案内する……ツス」

俺から話してもいいが、なんというかそれは卑怯な気がした。大事なことは、他ならぬ結束バンドの一人である後藤の口から伝えた方がいいと思えたのだ。

「……ねえ、同級生なんだから敬語使う必要なんてないよ」

「あ、ああ。分かった」

喜多の圧倒的な陽キャオーラは俺を圧倒していた。

直視するだけで、彼女が陽キャの中の陽キャ、真のリア充だと分かっってしまうのだ。

彼女の顔の中でまず目を引くのは、キラキラと輝く瞳だろう。新緑のような色をしたそれは、常に好奇心の光でいっぱいだった。

他の顔のパーツも綺麗に整っていて、可愛い顔の魅力を引き立てていた。

あまり直視しているとうっかり惚れかねない。

俺は彼女に背中を向けると、後藤の元へと案内を始めた。向かうのは、階段下のデッドスペース。先ほど俺たちが昼食を取っていた場所だ。

後藤のことだから、うまくコミュニケーションを取れなかったことを落ち込みながらあそこでギターでも弾いていることだろう。

思わず、彼は言い募る

元気に話しかけてくる喜多に、どもりそうになりながら返答を返し
ながら一緒に廊下を歩く。

「――それで、比企谷君は後藤さんの応援に来たわけね!」

「応援っていうか、なんていうか。まあ、あいつが本当にうまくやれる
のか不安だったのは事実だな」

しかし、人にものを伝えること一つにも応援がいる人間とはいった
いなんなんだろうか……。

「ふーん、なんか素直じゃない言い方」

喜多は少しだけ笑いながらそんなことを言った。

少し話した感じ、喜多はどうやら嫌味などところのない真のリア充の
ようだった。誰かを蹴落とすことなどということには見向きもせず、
ただ自分が楽しく、そして周りが楽しくなるよう努める、真のリア充。
逆に中途半端に劣等感のあるリア充などと、俺のようなぼつちを
見かけると積極的に攻撃してくる。このことから、ぼつちは真のリア
充とリア充モドキを識別するリトマス試験紙だと言えよう。

リトマス試験紙たる俺だからこそ言えるが、俺は喜多にリア充への
憎悪を越える好感を覚えていた。

というか、俺的にはぼつちというだけで攻撃してくるリア充ではな
いだけで悪くない感触を得ていた。おい、俺ちよろすぎるだろ。

「あ、いた! 後藤さ……えっ、何で泣きながらギターで弾き語りして
るの……?」

後藤を見つけた喜多は若干引いていた。階段の下では、後藤が滝の
ような涙を流しながらギターを弾き鳴らしていた。

どうやら自らの黒歴史についての歌らしい。歌詞はふざけていて
歌声も適当なのに、不思議と惹き付けられる演奏だった。

そういえば、あいつが一人でギターを弾くのをちゃんと見るのは、
これが初めての気がするな。

「すごい後藤さん！ ギター上手なのね」

いつの間にか後藤の元に近づいていた喜多が、キラキラした目で称赞を口にしていた。

「あつ、えつ、今の聞かれて……！」

「ねえねえ、他にも弾けるの？ もっと聞かせて！」

目をキラキラと輝かせて、喜多は後藤ににじり寄った。

瞬間溢れでる陽キャオーラ。喜多の周囲に光が差し、周囲の気温が上昇する。しおれた植物がこの場にあつたのなら、きつと一瞬の満開の花を見せたことだろう。

「まずい、伏せろ後藤！ 目を焼かれるぞ！」

「うわああああ！ 浄化されるうううううう！」

予想通り、喜多の陽キャオーラが直撃した後藤は目を抑えて悲鳴を上げていた。見間違いでなければ、抑えた目からはうつつすら煙が出ていた。

「あー、喜多。その辺にしてやってくれ。後藤が消滅する」

なおも後藤に近寄って演奏をせがもうとする喜多を、俺はやんわりと制止した。

「それで後藤、お前の要件を伝えてみたらどうだ？」

蒸気を出した目を少しづつ回復させる後藤は、さながらとある漫画の巨人のような姿だった。俯いたまま、彼女は言葉を探していた。

「えっと、喜多さんギター弾けるって聞いたから、それでうちのバンドのギターボーカルして欲しいってお願いしたくて……」

しどろもどろで早口だったが、それでも後藤の言葉はなんとか喜多には伝わったようだ。内心少しだけ胸を撫で下ろす。

「ああー。……ごめん。私、そのバンドには入れないかな」

喜多の申し訳なさそうな声に、後藤が焦り出す。

「あつあの、私以外のバンドメンバーはこんな根暗な感じじゃなくて、週末はバーベキューするし、ライブ後はいつもリズムジンで躍り狂ってて……」

「そんなパリピなバンド嫌なんだけど……」

追い詰められた後藤は、なぜか口からでまかせを吐いていた。

「ていうかそつちの人はそんな雰囲気に見えないけど」

「あつ、比企谷さんはいつもマラカス持って賑やかしてます。あと荷物持ち」

「おい、俺の扱いひどくないか」

口を出さずに見ているだけのつもりだったのに、ついつい言葉を出してしまった。

……こいつ、言葉の端々からそんな気配を感じてたけどやっぱり俺のことなめてるんじゃないだろうか。

「喜多、コイツの妄言はともかく、わりとまともな奴らだぞ。後藤に比べればな」

「ひ、ひどい……」

勝手に落ち込む生意気な後藤を放置して、俺は彼女に問いかける。

「喜多、お前は何を躊躇っているんだ？」

ちよつと接しただけだが、喜多が未知に対して躊躇わずに飛び込める奴であることは何となく察しが付く。真のリア充とは、常に新しいものには敏感なものだ。(ぼっち調べ)

ともかく、ギターに興味を示したのにバンドには入りたくない。そんな態度を、どこかちぐはぐなものに感じたのだ。

俺の視線を受けて、喜多は少しだけ口ごもった。わずかな沈黙。彼女は最後に後藤の顔をチラと見ると、やがて言葉を吐き出した。

「私実は、ギター弾けないの」

わずかに後藤が目を見開く。完璧で、何でもできそうな喜多の晒した、思わぬ嘘。

どうしてそんな？を、と問う前に、彼女は訳を話し出した。

「憧れている先輩がいてね。ベースやってて、前のバンドの時頑張つて追いかけてたの。でも急に辞めちゃって、それでその先輩が新しいバンドのギターを募集をしていたから、思わず手を上げて、でもギターなんて弾けないから、結局ライブ前に逃げて来ちゃったの」

喜多が下を向き、ぎゅつと裾を握る。彼女の陽気なあの輝いていた目が今どんな色をしているのか、俺には見えなかった。

「だから、私はバンドなんかやっちゃいけないの。だって、逃げ出した

んだから」

逃げ出したから、という言葉をも、喜多は重苦しい響きを以って吐き出した。裾を握る手に力が籠る。

「――別に逃げたっていいじゃねえか」

思わず、声を上げる。これ以上俯いた喜多を見たくなくて。

「え？」

「なんで一回逃げたらバンドやっちゃいけないんだよ。別に逃げた後に他のところでバンドやってもいいだろ」

「でも……」

なおも言い募る喜多に、俺は唇の端を上げて笑って見せる。

「俺なんてバイト二回もバックレたけど、未だに新しいバイトしてるぞ。ここにいる後藤なんて、バイト初日に風邪ひいてバックレようとしてた」

気まずそうに少し目を逸らしながらコクコク頷く後藤。

「お前が一度逃げただけでそんなに思い詰めている理由が分からない。――ぼっちは、その程度の失敗何度も繰り返しながら生きてるぞ」

思うに、喜多はなんでもできるから自分に厳しいのではないか。勉強も運動も友達作りも、妥協せずに頑張る。だから結果が出る。

けれども、それじゃあ息苦しいのではないかと俺は思う。

その点、ぼっちは良い。なんでもはできないぼっちは、失敗の数だけならリア充よりもずっと上だ。

「お前みたいな奴は、俺みたいにダメな奴を見習え」

「ふっ……ふふっ。なにそれ、普通逆じゃない？」

耐えかねて、という風に喜多は笑った。それは、今まで見た笑顔とは少し違うようだった。

「でも、今回だけは騙されてもいいかも」

陽キヤにも色々ある

下北沢についてから、喜多はずっと落ち着かない様子だった。

「なんでお前らそんなにびびってんだ？」

後藤がぶるぶる震えているのはいつものことなのでスルーするとして、喜多の様子は何かおかしかった。てっきり物怖じしない奴かと思っていたが。

「私の前のバンド下北系で、この辺で活動してたのよ。バツタリ会わないかしら……」

「そんな奇跡起こらないだろ。……だから離れろ、後藤と喜多」

俺の後ろには、後藤がぴったりとくっついてきていた。その手は俺の肩に。そして喜多は、そんな後藤の後ろに身を隠すようにして引付いて歩いていった。

「むっ、無理です！ 知らない場所怖いです！ 恥ずかしいです！」

「どう考えても今の体勢の方が恥ずかしいわ！」

明らかに人に見られている。ぴったりくっついて三人並んでいる姿は明らかに浮いている。

「とにかく、目立つからさっさと行くぞ。……せめて手を離してくれないか？ 歩きづらい」

後ろを振り替えて言うが、後藤は無言で首を振るだけだった。

後藤の小さな手が肩にちょこんと乗っている現状は、ひどく落ち着かない。

じんわりと伝わってくる手の熱に、こちらまで熱くなってしまうぞうだ。

そんな風に歩いていると、突然馴染みのある声に話しかけられた。

「あれ、比企谷君とぼっちちゃんじゃん！ ……何してんの？」

伊地知先輩はヒラヒラ手を振りながらこちらに近寄ってきた。洒落た下北沢の街中にあっても、伊地知先輩の容姿は見劣りしない。まさしくここの住民と言えよう。

先輩は奇妙な体勢でくっつく俺と後藤のことを頭にはてなマークをつけながら眺めていたが、ほどなくして後藤の後ろに隠れて肩をぶ

るぶる震わせている喜多の存在に気づいたようだ。

「……あれえ？　なんか見覚えあるような」

喜多の顔を確認しようと接近してくる先輩。喜多が体を小さくする。

やがて伊地知先輩は、大きな声を上げた。

「あーっ！　逃げたギターー！」

「あわわわわわ！」

慌てて涙目でおろおろする喜多の様子は、ちょうど動揺している時の後藤のようだった。

どうすればいいのか、とキョロキョロと辺りを見渡す目。ふるふる震える肩。意味のない声を漏らし続ける口。というか、お前そんな奇声出せたのか。

完璧な奴だと思っていたが、案外脆い奴なのかもしれない。

すると、伊地知先輩がやってきた方向から新たな人影が現れた。

「ぼっちたち、もう来てたんだけだ。……ってあれ」

続いて現れた山田先輩の姿を確認した喜多は、その場に華麗な土下座を決めた。

「すすす、すいませんりョウ先輩！　お詫びに先輩の言うこと何でも聞きますから！　何でも命令してください！　というか先輩の手でめちやくちやにしてください！」

「なんかとんでもないこと口走ってるんだけど!？」

下北沢の路上で発生した謎の騒ぎに、周囲を歩く人たちはなんだなんだと目を向けて来ていた。

注目されている状況が苦手なのだろう。後藤はポツリと呟いた。

「もうやだ……おうち帰りたい……」

……おおむね、同感だった。



「ええー、喜多ちゃんギター弾けなかったの!？」

「はい……本当にすいません……」

あまりに目立つのでひとまずSTARRYに移動した後。改めて、伊地知先輩は喜多に事情を聞いていた。

「しよぼん、と焦燥する喜多は、先ほどまでの元気な様子など欠片も見られない。」

あまりにも憐れだったので、俺は一応口を挟むことにした。

「ああー、先輩。一応こいつなりに悩んだみたいですよ。面白半分でもバックれたわけじゃなさそうでした」

「比企谷君……」

喜多と後藤が意外そうな顔で俺を見つめてくる。

伊地知はどう出るかと思えば、意外にも彼女はあまり怒っていないような様子ではなかった。

「その……怒らないんですか?」

喜多が恐る恐る問いかけると、伊地知先輩は苦笑いを浮かべた。

「まあ、気づかなかった私たちにも非はあるしねえ。それに、あの日喜多ちゃんが逃げたからこそ、ぼっちちゃんに会えたって言うてもいいからね。怒らないよ」

この人……天使か? 伊地知先輩のことは今度から脳内で下北沢の天使と呼ぼう。

「でも……それじゃ私の気が収まりません! せめて何かさせてもらえませんか!?!」

そんな話を聞いていたらしい。後ろを向いていた伊地知先輩の姉、伊地知星歌さんが振り返り言った。

「じゃあ今日一日ライブハウス手伝ってくれない? 忙しくなりそうなんだよね」

こうして、喜多のSTARRYでのバイトが始まった。メイド服で。

「なぜメイド服……」

「ねー。ていうかお姉ちゃんなんであんな服持ってるんだろ」

メイド服を着れた記念か、喜多はスマホで自分の姿を撮影していた。一回撮るごとにポーズを変えて撮るが、そのどれもが似合っている。

て見事だ。

というか笑顔から放たれる陽キャオーラがすごい。なぜかキターン！ という擬音が聞こえてくる。なんだこれ。

「比企谷君！ どう、これ」

くるつと振り返った喜多が俺に問いかけてくる。ふわりと舞ったロングスカートからなんとか目をそらした俺は、改めて喜多の姿を観察した。

赤髪の上にちよこんと乗ったホワイトブルム。

どうだ！ とこちらを見る目は相変わらずキラキラして眩しい。

身に纏った本格的なメイド服が、非日常的な魅力を放っている。服を押し上げる胸部についつい目がいきそうになる。

男なら一度は憧れる、美少女メイドという存在。それが目の前に現れて、こちらを向いている。

……あぶねえ、中学の頃の俺ならうっかり惚れて、告白して振られちゃうところだったぜ。いや、振られちゃうのかよ。

そんな内心を誤魔化すように、俺は適当な言葉を紡ぎだした。

「まあいいじゃねえの。知らんけど」

自分で出した言葉にわずかに頬が熱くなる。

「でしよー！ いやあ、やっぱり私可愛すぎるかも？」

こちらの言葉を聞いているのか聞いていないのか、上機嫌に言う喜多はもうこちらを見ておらず、先ほどスマホで撮った写真を精査していた。

おい、ドギマギしてた俺が馬鹿みたいだろ。

「さ、喜多ちゃん。ぼちぼち働こうかあ！」

「はい、精一杯頑張ります！」

意気込んだ喜多は、その気合いに見合う仕事っぷりをみせた。清掃から開店の準備まで、与えられた仕事をテキパキとこなしていく。

「あいつ、臨時なのに手際いいな」

「ねー。喜多ちゃん！ 愛想いいから受付もやってみようか！」

伊地知姉妹の話し声が聞こえてくる。それを聞いた後藤は、びくんと肩を震わせた。その顔面は絶望で崩壊寸前だ。

「初日で接客……わ、私より使える……」

何か思うところがあつたらしい。

のそのそ、と歩いていった後藤は、当たり前のように可燃ごみのゴミ箱に入ると、どこからともなくギターを取り出した。

「それでは、聞いてください。『その日入ったバイトよりも使えない私のエレジー』」

お前は誰に向けて演奏しているんだ？

るーるるー、と悲し気な旋律が流れる。見間違いでなければ、後藤の口からは『ふよふよー』と半透明の魂のようなものが飛び出ていた。

◇

今夜も複数のバンドが演奏して、観客は盛り上がっていた。そんな様子を見ると、準備していたこちらとしては誇らしいような達成感に包まれていた。

裏方というのは意外と俺にあっているかもしれない。人知れず頑張っている影の立役者なんてかっこいい、と思うのは俺が未だに中二病から抜け出せていない証拠だろうか。

「それじゃあ、今日は楽しかったです」

仕事をしたただけだというのに、喜多はひどく満足気な顔でSTARR Yを去ろうとしていた。きつと、彼女の中の結束バンドへの負い目のようなものが払拭されたからだろう。

「結束バンドの活動、陰ながら応援してますね」

けれども、ギターを担ぎ微笑む彼女は、少し寂しそうにも見えた。本当は、もう一度やり直したいのではないか。そんな印象を抱くが、しかしそれを決めるのは彼女だ。そして、結束バンドだ。

喜多が出口の扉に手をかける。その背中は、少しだけ寂しそうにも見えた。

「あ……」

後藤が何か言いたげにしている。一步踏み出したいが、本当に踏み出しているのか、という迷いが感じられる。

俺と思っていることは同じだ。そう確信したから、俺は後藤の背中を押した。

まるでそれを待っていたかのように、後藤は喜多のもとへと走り出した。

そうだ。行け。他ならぬ結束バンドのお前が引き止めなくて、誰が引き止めるんだ。

後藤の足が加速する。狭い室内を、一瞬で駆ける。……おい、加速しすぎじゃないか？

「あつ、あの、喜多さん！……アツ」

勢い余った後藤が、壁に激突する。がらがらがつしゃん！と黒いカーテンが落ちてきて、倒れこんだ後藤を覆い隠した。

……まずい、強く押しすぎたか。

「後藤さん!」

「ぼっちちゃん大丈夫!」

驚いた喜多が振り返り、伊地知先輩と山田先輩が駆け寄る。後藤は、何か言いたげにカーテンの下でもごもご言っていた。

伊地知先輩と山田先輩の二人で、後藤の体を助け起こす。俺はといえば、今回ばかりは静観しようと考え、黙って見ていた。

「き、喜多さん、このまま帰って本当にいいんですか？ 本当は、結束バンドに入りたいんじゃないんですか」

「でも、私ギターも弾けないし……」

「き、喜多さんの手、すごく硬くなってました。それって」

山田先輩の顔を見る後藤。

「うん、ギターたくさん練習しないとならない」

「に、逃げ出したって言ってたけど、本当は練習してたんじゃないですか？」

喜多が大きく目を開く。

「き、喜多さんがそう思っていたのなら、私も一緒にバンドしたいです！ その……結束バンドに入ってくれませんか!」

精一杯の勇気を出して、後藤は言葉を振り絞った。伊地知先輩と山田先輩も、同意するように喜多を見た。

温かい空気が、その場に流れた。ああ、こんな景色を見れたのなら、
結束バンドを見守りたいと思った俺の判断は間違っていないなかったの
かもしれない。

わずかに瞳を潤ませたように見えた喜多は、やがて静かに頷いた。

こうして、彼女は肯定される

歌詞ってどうやって書けばいいんだろう？

もう何度目か分からない問いかけに、私のペンはぴたりと止まった。

ノートには、書きなぐられた言葉たち。一番前のページには頑張れ、未来は明るい、きつとやれる、などの明るい文字が並んでいる。見ているだけでも気分が悪くなりそうだ、とページを前に戻す。

少し前のページには、つらい。学校行きたくない。歌詞書けない、などのネガティブな言葉がずらずら並んでいる。こちらの方が筆跡が荒々しい。

「やつぱりこっちだよね……」

ぺら、とページを前に戻す。明るい歌詞。みんなが好きな歌詞。

……薄っぺらくて、ありきたりな歌詞。

「……喜多ちゃんか歌うんだし、これでいいんだよね」

自分の感情を脇に置いて、私は暗い歌詞すべてに横線を引いた。

ひとまずこれで完成にしよう、と歌詞ノートを閉じる。

「それで、誰に見せよう」

誰かに見せて、ネガティブな感想をもらったら。あるいは、気を遣うような言葉をかけられたら。……耐えられない。その場から逃走する自信がある。そしてそのままひきこもりコース。

そう考えた時に思い浮かんだ顔は、濁った瞳をした少年だった。

「比企谷さんなら、率直な意見を言ってくれるかも」

良くも悪くも遠慮がない彼なら、自分が欲しい意見が聞けるかもしれない。

ロインを開き、比企谷さんのアイコンを探す。『ロインなんてリア充のやるものだろ』なんてばやいていた彼は、結局喜多さんに押し切られてインストールしていた。

『比企谷さん、できた歌詞を見てもらうことはできますか？』

ロイン画面をじつと見つめて、ややすると既読がついた。

『わかった。学校に持って来い』

簡潔で要件だけ伝える姿勢は、普段の彼と同じだ。その様子に少しだけ安堵した私は、歌詞ノートを鞆に詰め込んだ。

放課後、例によって階段の下で。私は比企谷さんに書いた歌詞を手渡した。

「よ、よろしくお願いします」

「おう。……まあ、別に俺は音楽に詳しいわけじゃないからあんまり待すんなよ」

短く言った比企谷さんは、ノートのページをめくる。彼は、表情一つ変えずに歌詞を読んでいた。

しばらく沈黙が続いて、私は耐えきれなくなって彼に問いかけた。

「ど、どうですか？」

私の問いかけに彼が顔を上げる。無表情だ。

「なあ、お前。本当にこんなこと思ってたんのか？」

問いかけに、一瞬口が止まる。比企谷さんが指さしたのは、最新のページの明るい歌詞。私が完成版として書いたものだ。

目線から逃げるように、下を向いて弁明する。長い前髪が私の視界を覆った。

「い、いやあー。でも売れてる曲ってこういうのばかりだし、私もそういうの書けたらいいなーって思ってた」

「無理だろ」

「……え？」

冷たい言葉に顔をあげる。彼は、今まで見たことのないような笑顔を浮かべていた。露悪的というか、嘲笑のような顔は、私の息を一瞬止めた。

「お前に世間一般で受けるような歌詞を書くなんて無理だろ」

頭が真っ白になる。反射的に言葉が口をついて出てくる。

「でも私が結束バンドの歌詞を任されたから、それに応えないといけないじゃないですか。無理とかじゃなく、私が虹夏ちゃんに期待されているから……だから、みんなに好きになってもらえるような歌詞

を書かなきゃ……」

「自分の感情無視して書いた歌詞なんかで人に好きになってもらえるのか？ 自分を出さなきゃお前が歌詞を書く意味ってなんだ？」

息が詰まる。

「ッ！ じ、自分を出すって言ったって、私はこんなぼっちだし、誇れるようなことなんて一つもなくて、だから、自分を出すことに意味なんてないです」

「お前が、お前だからこそ、結束バンドの作詞を任せられたんだろ？ 山田先輩も伊地知先輩も喜多も、お前の歌詞を持ってきて欲しいんじゃないのか？ お前自身が持っているものは、本当に何も無いのか？」
「——わ、私は、比企谷さんみたいに自分に自信を持つことなんてできません！」

私の叫びに、比企谷さんは少し驚いたように目を見開いた。

「私がぼっちなのは、私がダメだからです！ ひとりが好きだからじゃありません！ 喜多ちゃんや比企谷さんみたいに、今の自分を肯定なんてできないです！ だから自分の歌詞なんて書けない！ 自分を出すことなんてできない！」

ああ、こんなにも正直に自分の中にある暗い感情を吐き出したのは、これが初めてかもしれない。しかし比企谷さんは、私の言葉を受けても堂々とした態度で言葉を紡いだ。

その様は、私が妬ましくて仕方がない、自分の考えに自信のある人の態度だ。

「別に、今の自分が肯定できる必要なんてないだろ。どうなりたいのか。どうありたいのか。少なくとも歌詞っていうのは、というか表現っていうのは、そういうことでいいんじゃないか？」

いつの間にか、比企谷さんは少し優しそうな顔をしていた。

「ぼっちが嫌なら、ぼっちである恨みつらみを吐き出してもいい。リア充への憧れを歌にしたっていい。そういう歌詞なら、書けるんじゃないか？」

「どう、なりたいのか……」

悩む私に、比企谷さんは少し優しく笑った。

「それに俺は、今のお前はそんなに自己嫌悪するほどのものじゃないと思うけどな。いいじゃねえか、ぼっち。孤高なんて、むしろかつこいいだろ。——俺は、今のお前が嫌いじゃない」

——ああ、私は初めて、こんなにも正面切って自分を肯定されたかもしれない。ギターを弾く私ではなく、ギターヒーローではなく、私自身を肯定されたような感覚。

不思議と体が熱くなる。心臓の鼓動が少し早い。こんな感覚、初めてだ。

「……あ、ありがとうございます」

今なら、歌詞を書けるかもしれない。自分だけの歌詞を。ぼっちで、根暗で、陰キヤな私にしか書けない歌詞を。



「ふう……こんなものかな」

気づけば深夜四時。自室の押入れの中で、私はようやく一息ついた。いつの間にか、ひどく肩が凝っている。思いついた歌詞を片っ端から書きなぐっていたからだろう。

夜遅くまで起きて作詞しているのも、もうこれで一週間ほどになるだろうか。目のクマがひどく、お母さんには、ちゃんと夜眠れているのかと心配されてしまった。

出来上がった歌詞は、直しに直しを重ねようやく自分が納得できるものになった。さて、今度結束バンドに誰かに見てもらわなければ、と思ってロインを開くと、随分前に虹夏ちゃんから連絡が来ていたことに気づく。

『明日の10時に下北沢集合ね!』

ひよっとしたら歌詞の件だろうか。ちょうどよい機会だ。私は分かりました、と連絡を返すと、すぐに眠りについた。

「……あつ、待って。一晚経ったらなんか不安になってきた。本当に

これでいいのかな。ていうかやっぱダメじゃない？ あああ、まずいまずいまずい。……やっぱり歌詞できてないって言おうかな……」

昨晚の達成感はどこへやら、私が朝起きた時には既に自信が揺らいでいた。

ちら、と歌詞ノートを見返す。暗くて、荒々しくて、力強い歌詞。よく書けている、と率直に思う一方、自分以外がどう読むのか全く分からない。

というか、本当に私なんかが書いた歌詞を喜多さんに歌わせていいのだろうか。

不安、緊張、劣等感。そんなネガティブな感情に囚われてどうにかなってしまいそうになった時、私は比企谷さんの言葉を思い出した。

「――俺は、今のお前が嫌いじゃない」

……不思議と、自信が湧いてきた。同時に、胸の奥に少しばかりの熱があるような感覚。最近感じる、比企谷さんのことを考えると少し熱を感じる現象について、私は名前を付けかねていた。

ともかく、結束バンドのみんなに会いに行こう。歌詞を見せにしよう。

スマホを手に持ち、起き上がる。時間は11時。……11時？

「ああああああ、寝坊したあああああああ！」

「すっすいませんでしたっ！」

駅につくなり、道のと真ん中で土下座を決めた後藤ひとり。その首からぶら下がったプラカードのようなものには、『私は遅刻するダメなぼつちです』とでかにか書かれている。

「……いや、そんなもの作ってる暇あったらさっさと来いよ」

「ゴパッ……」

比企谷八幡の正論に、ひとり土下座したまま血を吐いた。

やはり、彼女の瞳は綺麗な色をしている

血を吐きながらもゆらゆらと立ち上がった後藤（怖い）は、ようやく自分がなぜ下北沢に呼び出されたのか理解できたようだった。

「あ、アー写、ですか」

「そうそう、バンドの宣伝とかに使うやつ！ 今日みんなの予定も空いてたし撮影会やろうかなって」

伊地知先輩の元気な言葉に、後藤は何事か小さく呟いたかと思うと、なぜか俺の方をチラリと見た。すぐに逸らされる視線。

「あつ、えつと頑張ります」

俯く様子はとても頑張ろうというようには見えなかったが、しかしすぐに逃げ出さないあたり一応やる気はあるらしい。

「ていうか俺がいる意味あるか？ 結束バンドの写真なんだから、映らないだろ」

「比企谷君はぼっちちゃんの通訳兼カメラマンでしょ！ いいからついてきて！」

日本語を話す者同士で通訳が必要とはいったい……？ まあ後藤のコミュ障はかなりのレベルなので、気持ちはわかる。しかし俺もコミュ障なのだ。正直なところ、綺麗な顔をしている結束バンドの面々と会話するのは未だに緊張するし、たまにどもりそうになる。

先輩たち、そして喜多はそれで話は終わりだと言わんばかりに歩き出してしまっているので、仕方なくついていく。

休日の昼間、下北沢の街中はそれなりの活気で賑わっていた。年若い男女が、洒落た格好をして外を闊歩している。

気後れしている俺と後藤を放置して、三人はスタスタと先に進んでいってしまった。

「あ、あの……」

「……ん？ ああ、俺か？」

後藤が進んで話しかけてくるなんて滅多にないものだから、聞き返してしまった。

「こ、この前は歌詞の相談、ありがとうございました。おかげで、良い

ものができた……気がします」

少しだけ口元を綻ばせて、彼女は嬉しそうに言った。

いつもネガティブな表情と調子に乗った表情しか見せていない彼女の素直な笑顔に、俺は少し動揺する。

「あ、ああ。まあ別に俺は具体的なアドバイスとかできるわけじゃないからな。良いものができたんなら、それはきつと後藤自身の力だろ」

「そうですね……私の力……えへ、えへへ……天才作詞家私、自身の曲をカバーして表舞台に登場、紅白歌合戦の大トリを……」

あ、また自分の世界に入った。いつもの後藤だ、と少し安心する。

「ぼっちちゃんたちー！ 早く早く、ここの古着屋面白そうだよー！」
伊地知先輩の声に、慌てて後藤の手を取り駆けだす。女の子の手を握っているという状況に、俺はいつの間にか慣れてしまったようだった。

古着屋を冷やかし始めた時は「この人たちやる気あるのかな……」
と思ったものだが、当初の目的を忘れてはいなかったらしい。

公園。坂道。よさげな壁。

写真映えしそうなスポットを物色する。俺も頼まれて数枚写真を撮った。正直なところ、結束バンドは全員顔面偏差値が高いので十分絵になっていると思うのだが、彼女らとしては納得していないようだった。

「うーん、なんかしっくりこないんだよなー」

「俺は良いと思いますけどね」

「そう？ ……でもアー写ってバンドの方向性を表す大事なものだからさー」

撮った写真をスマホで確認しながら言う伊地知先輩。その後ろから、ひっそりと忍び寄る影があった。

「あ、あの……」

油断している伊地知先輩の肩を静かに叩く後藤。それにまったく気づいてなかった伊地知先輩は、大きく肩をびくりと震わせた。

「うわっ、びっくりした。なんだ、ぼっちちゃんか。どうしたの？」

「あ、あっちの方にいい感じの壁が……」

後藤が見つけたのは、大きな木の絵が描かれた壁だった。確かにこの前に立ったら、いい写真が撮れそうだ。

「じゃあ、早速撮っていきましょう！ 比企谷君、よろしくね！」

「はい。じゃあ、行きますよ。……はい、ピーナッツ」

パシャ、と伊地知先輩のスマホのシャッターを切る。

「……いつも思うけど、その掛け声何？ ピーナッツ？」

「知らないんですか？ 千葉県民はみんなこう言って写真を撮るんですよ」

「いや、聞いたことないんだけど……」

周囲を見渡すが、どうやら全員本当に聞いたことがないようだった。

「いいですか？ 千葉県民はやれ東京の名前を借りすぎだのデイズニールンド以外に何も無いなどという誹謗中傷を浴びせられ続けられています。意外なことにピーナッツの生産量が日本一なんです。そんな千葉県民の誇り、魂を表すのが、このピーナッツという掛け声なんです。分かったら、都民の皆さんも俺に続いて唱えてください。はい、ピーナッツ」

「はい、ピーナッツ」

まじかこの人たち。ノリいいな。

「ってそんなことどうでもいいよ！ いいから写真見せて！」

もう十分ノリに付き合ってもらったので、大人しくスマホを差し出す。四人がスマホを覗き込んだので、俺はスス……と距離を取った。「うーん、なんかもうひとひねり欲しいよね。バンド感っていうの？ 青春感？」

その後も数枚写真を撮るが、なかなか彼女らが納得するものがない。

俺としても、彼女らのためになればと意見を出す。

「ジャンプするとかどうですか？ 古今東西、オープニングでジャンプする作品は神作品と言われています」

「私も聞いたことがある。ジャンプすれば神作品。つまり、私たちも

ジャンプすれば神バンドになるのでは？」

意外にも山田先輩のノリが良かったので、一枚撮ることにする。手をつないでジャンプする四人。しかしシャツターを押した瞬間、俺は大きく目を逸らすことになった。

「どうしたの比企谷君、写真見せて」

「……はい、これです」

隠すのも不自然なので、伊地知先輩にスマホを渡す。

「あー、ぼっちちゃんのパンツが映ってる。ぼっちちゃん、とんでもないものが撮れちゃったね」

伊地知先輩がニマニマしながら後藤の表情を見る。

「あ、すみません、無価値なものを写してしまつて。消してください……」

「いや、もつと可愛い反応期待してたんだけど……」

後藤はどんよりとした表情で伊地知先輩に言う。とてもパンツを見られた女子高生の反応とは思えない。

伊地知先輩は思わぬ反応にどうすればいいのか分からないようだった。微妙に気まずそうに視線を漂わせた彼女と視線が合う。

「ていうか、比企谷君ぼっちちゃんのパンツ見たな？」

「あー！ 比企谷君、見たのに何も言わずにしらばっくれるようとしたわね！」

「比企谷最低。ぼっちにパンツ代払え。私に分け前を渡せ」

「いや、不可抗力ですよ。俺がパンツを見ようとしたんじゃない、パンツが俺の方に向かってきたっていうか、予期せぬ出会いだったっていうか、仕方ないことだったんです」

やいのやいのと俺を批判してくる結束バンドに、なんとか弁解しようとする。しかし彼女らの視線は冷たいままだ。まずい。男が一人しかいない状況でこれはまずい。

助けはないのか、と後藤の様子を窺う。張本人が何を言うのか。それにこそ、この俺の裁判の判決はかかっている。

「あ、あう……比企谷さんに私の……わ、あわわわわ」

後藤はなぜか赤面しながらすごい動揺を見せていた。

おい、さつきまで無価値なものとか言ってただろ！

後藤の様子を確認した結束バンドの視線が一層冷たくなる。

「比企谷君、後藤さんをいじめるのもほどほどにね？」

「ダメだよー。ぼっちちゃんのメンタルは普通の人よりずっと脆いんだから、もつと大事に扱ってあげないと」

「比企谷、感謝料。私にも払って」

四対一。反論するまでもなく、俺の負けだった。

「いやその、すいませんでした」

なんか理不尽じゃない？

あれから、なんとか彼女らが納得できるアー写が撮れたので今回の撮影会は終了となった。

「比企谷君、今日はカメラマンありがとね」

「まあ、結束バンドの役に立ったならいいです」

正直写真一つで何が変わるのだろうと最初は懐疑的だったが、出来上がった写真は案外結束バンドがどういうバンドなのか伝わってくるようなものだった。

「あ、あの。最後に、歌詞が完成したので見てほしいんですけど……」

後藤の言葉に、全員が振り返る。心なしか嬉しそうな顔だ。

「本当？ 見せて見せて！」

「は、はい」

後藤が広げたノートを覗き込む三人。反応は上々だ。ここがいい、このフレーズが良いと好き好きに言い合う彼女らは楽しそうだ。

「あ、あの比企谷さん」

「おう、なんだ」

そんな騒ぎからスルリと抜けてきて、後藤が俺に話しかけてきた。「我儘かもしれないですけど、比企谷さんには私の歌詞、歌になってから見てほしいんです」

「……というと、山田先輩の作曲が終わってからってことか？」

こくんと頷く後藤。正直後藤がどんな歌詞を書くのか楽しみにし

ていたのだが、彼女なりに何か考えがあるのだろうか。

「その、比企谷さんには、私を肯定してくれたあなたには、完成した状態の歌を見てほしいっていうか、一番良いものを見てほしいっていうか、その、結束バンドの外から、演奏する私たちを生で見たいってほしいんです」

「……あれか。完成途中のものは見られたくないとかそういうやつか」

クリエイターという生き物はそういうことに敏感になるとか聞いたことがある気がする。後藤もそういうタイプなのだろう。

「そ、そうじゃないと言えばそうじゃないんですけど……まあいいかと、とにかく、私が言いたいのは」

そう言つて、後藤は顔を上げた。長い前髪の奥にある瞳と直接目が合う。普段俯いているせいではなかなか見ることができないそれは、やはり綺麗な色をしていた。

「私たちのライブ、楽しみにしててください」

遠慮がちな、けれど微かな自信を窺える笑み。

ああ、やっぱりコイツは卑怯だ。いつもオドオドしているくせに、肝心な時にはこんなに堂々としているのだから。

頑張ると成長と動機と

まだ客を入れていないSTARRYには、結束バンドの面々がいた。

山田先輩が作曲を終わらせてきたらしい。今はみんな曲を聴いて、感想を言い合っているところだ。概ね良い反応だ。

そして、作詞と作曲という特殊な関係になった後藤と山田先輩には、絆が生まれたようだった。

なぜか猫のように後藤の顎下を撫でる山田先輩の表情は明るい。

「曲もできたし、これでいよいよライブができるね!」

結束バンドの面々はいよいよライブができるという事実胸を躍らせていた。

「ライブ、楽しみです!」

「私の腕を見せる時が来た」

「うんうん。——お姉ちゃん、次のライブの日はいつだっけ?」

浮かれたメンバーの反応を聞いて、伊地知先輩がパソコンで作業をしていた店長に声をかける。

しかし、振り向いた彼女の顔は冷たかった。

「え? 出さないけど?」

「……え?」

「ライブ。出さないよ」

店長の顔は有無を言わさない口調に、伊地知先輩は固まってしまった。

「な、なんで……」

「この前のクオリティだったら出さない。知ってるでしょう? うち、ライブ前には音源審査とかやってんの。前のあの下手くそな演奏なら出せない」

「じゃ、じゃあ私たちどうすれば……」

「え? 一生身内で仲良しごっこしてな」

ふるふると伊地知先輩が震え始める。彼女の手がぎゅ、と服の裾をつかむ。

後藤と喜多、それから山田先輩は心配そうにそれを見ていた。

「お、お姉ちゃんの……お姉ちゃんのばかり！ 未だにぬいぐるみ抱かないと寝れないくせにー！」

衝撃の捨て台詞を吐いた伊地知先輩は、そのまま勢い良くSTAR RYを飛び出していったしまった。

「お、追いかけてみましょう！ ほら、山田先輩も後藤さんも！」

喜多が二人を立たせて、伊地知先輩が去っていった扉を指さす。状況が飲み込めずオロオロする後藤、それと相変わらず無表情で何を考えているんだかよく分からない山田先輩は、彼女に連れられて店の外へと出て行った。

残された俺は、店長の方を向き、言葉をぶつける。

「ずいぶん乱暴な言い方でしたね。そんなに妹さんを挑発したかったですか？」

店長の鋭い目が俺を貫く。……やっぱりこの人怖いな。細められた目が威圧するようにこちらを見る。伊地知先輩によく似た顔をしているが、彼女にない迫力がある。

勢い込んで向き合ったはずなのに、少し気圧される。

「……比企谷。お前に伝言を頼んでもいいか？」

「自分で言ったらどうですか？」

「言おうとしたら逃げられたんだから、仕方ないだろ」

言わなきゃ分かんないですよ、というありきたりな言葉を俺は飲み込んだ。

店長が妹のことを大切に思っていることなんて、ちよつと見ればすぐにわかる。それでもあんな言葉をかけたということは、きつと何かしらの理由があったのだろう。

それでも、姉妹の関係を崩しかねない発言をした彼女には、何か言わないと気が済まなかった。

「二人の兄として言いますが、妹ってやつは兄や姉が思っているよりずっと慕ってくれているものだと思いますよ」

「……私の半分程度しか生きていない奴に言われなくてもわかってるよ」

目を逸らした店長の目は、自分が思っていたよりもずっと優しい目をしていたので安心した。

……それよりも、気になったことがある。

「え？ 店長ってアラサーだったんですか？」

「……あ？」

俺の言葉に、店長の目が鋭くなる。ギロ、と俺を貫く瞳は、襲い掛かってくるんじゃないかと思わせるほど凶悪だった。

ふええ……やっぱりこの人怖い……。

「とにかく、虹夏たちに伝言だ。オーディションをやるから、それに合格したらライブに出してやるって伝えてくれ」

「結束バンドの成長を促すためですか？ やっぱりシスコンですね」

「——あんま余計なこと口に出すなよ……！」

「ツス。すみませんっす」

これ以上怖い店長と話していたくなかった俺は、足早にSTARR Yを後にした。

下北沢を走り、なんとか結束バンドの背中を見つける。

そう遠くには行っていない。彼女らが行きついたのは、ちよつとした軽食や飲み物などを売っている出店のようだった。

少し頬を膨らませながらストローを啜る伊地知先輩に、山田先輩や喜多が何事か話しかけている。それを少し離れて見る後藤は、どうすれば良いか分からずにあわあわしているようだった。

走って乱れた呼吸を整えながら、俺は彼女たちに近づいた。

「おい、店長から伝言があるぞ」

「あれ比企谷。遅かったね」

山田先輩の言葉を聞いているのか聞いていないのか、伊地知先輩は不機嫌そうにそっぽを向いたままだった。

「来週オーディションをやるから、そこで合格すればライブに出してくるってよ」

「オーディション……伊地知先輩、良かったですね！」

俺の言葉に大きく目を見開いた伊地知先輩は、いつもの彼女らしい笑顔を見せられた。

「オーデイション……そっか、そうなんだ……!」

「来週オーデイションやるなら、これからいっぱい練習しないとですね!」

「あつ、はい。そうですね。頑張ります」

「ぼっちたちにはデモ音源渡しておくから、それで練習しておいてね」
「いやダメダメ! エアバンドじゃないんだから、ちゃんと練習しないと!」

その日から、結束バンドの練習が始まった。

学校に来て後藤はいつもギターを背負っていて、放課後になるといそいそと教室を出て行っていた。喜多と合流しているところを見ると、たぶん結束バンドの練習に行っているのだろう。

俺と言えば、根を詰めて練習している結束バンドの練習の邪魔としては悪いかと思ひ、最近彼女たちには会っていない。

少しだけ虚しいような気分をごまかすように、本屋に行ったりアニメを見たりと自分の時間を過ごしていた。

そんなことをしているうちに数日が過ぎた。学校に来る後藤の顔色は、あまり良いとは言えなかった。いつも陰気な表情をしている彼女だから分かりづらいが、何かしら悩みを抱えているらしい、ということには分かった。

無理に関わりすぎるのは良くない。そうは思っているけど、後藤の様子を見ていると居ても立っても居られないような気分になっていた。

「後藤。練習は順調か?」

「あ、はい。虹夏ちゃんもリョウさんも喜多ちゃんも、頑張ってます」

「その割に浮かない顔だな」

「……」

後藤はわずかに考えるように黙ったかと思うと、やがてポツポツと話し始めた。

「み、みんな、店長さんに成長を見せつけるんだって頑張ってます。で

も、成長って言っても何かが決定的に変わったような気はしなくて。たしかに演奏は少しは上手くなっているかもしれないけど、結局オーディションで何を見せればいいのか、一週間で何ができるのか、分からないなって思ってる」

ああ、やつぱり後藤は俺と同じ、いろいろなことを考えてしまうタイプの人間だ。

頑張れ、上手くなれ、合格しろ。そう言われても、その意味について、具体的に考えてしまう。

きつと、何かに熱中していても同時にそんな自分を冷静に見つめることができってしまうのだろう。

少し考えてから、俺は俺なりの考え方を伝えることにした。

「——俺が思うに、成長なんていうのはあやふやな言葉で、その実態は多分頑張ったなっていう自己満足なんだと思う」

頑張ったら必ず成果が出るなんて嘘だ。だから、頑張る意味なんてない。そうやって諦めるのは簡単だ。

「でも、成果を出すためには頑張るしかないっていうのもまた真実だ。言葉をこねくり回して、諦観や虚無感をこねくり回しても結果は変わらない。だから、本気でやりたいって思ったものには、がむしゃらに、たとえカツコ悪くても頑張るしかないんだと思う」

「ひ、比企谷さんにしては珍しく前向きな意見ですね」

「そうか？ ……後藤は、バンド活動で何がやりたいと思ってるんだ」

大事なものはモチベーション、動機だ。義務感や責任感で頑張るのは限界がある。頑張る理由は、自分の内側から探すのが一番良い。

「わ、私は……別に、立派な目標なんてないですよ。ただ、チャホヤさりたいとか、そういう自分勝手な理由があるだけです」

「別にいいじゃねえか。チャホヤされる。理由としては十分だ。でも、多分お前はそれだけじゃないんだろう？」

最初は成り行きだったのかもしれない。公園でたまたま伊地知先輩に声をかけられて、そのまま初ライブして。

その後彼女らと交流していくうちに、後藤にとって結束バンドは大

切なものになっているようだった。ただバンド活動したいからではなく、人と関わりたいからではなく、結束バンドだからこそ、彼女は慣れないバイトをして、人前に立って、頑張ろうとしているのではないだろうか。

「他のメンバーと話してみても、自分にとって結束バンドってなんなのか改めて考えてみたらどうだ？」

「結束バンドが……？」

何か考える後藤。

きつと、彼女なら答えを出せる。そう信じて俺は彼女との会話を終わらせた。

彼女がどんな風に決意を固めたのか。俺はそれを、オーディションでの演奏で見せつけられることになった。

はじめで、彼は熱にうかされる

オーディションの場合は、俺が今まで経験したことがないような緊張感に包まれていた。

結束バンドの準備を待っている俺は、店長、そして名前も知らぬPAさんと一緒にいた。

「店長。本当にオーディションなんてやって結束バンドを出すか決めるんですか？ 本当は妹さんが自分のライブハウスでライブやる姿を見たいんですよ？」

「あんま余計なこと言うなって言っただろ。それに、結束バンドの演奏がダメだったなら本当にライブには出さない。……そんなの、どっちにしても良い結果にならない」

ああ、やっぱりこの人はシスコンだな、と安心する。結局のところ、彼女は心配なのだ。結束バンドが、彼女たちがバンドとしてやっていけるのか。決して甘くない世界で自分たちの音楽を続けることができるのか。

「比企谷さん、あんまり店長をいじめてあげないでください。これでも今から始まるオーディションにまるで自分のことのように緊張してるんですから」

「お前も余計なこと言うな！」

俺たちの会話を聞いていたPAさんがおっとりした口調で言う。

黒髪に優しい気な顔は、見るものを安心させるようだ。しかし、よく見ると耳にはピアスがびっちょり入っていて、黒髪の内側は紫色に染まっている。

正直、怖い。大人しそうな見た目とゴリゴリに開けたピアスのギャップが怖い。話してみると普通に優しいのに、よく見たらちゃんと怖い人なのマジ怖い。

平静を装って話しているが、どんな本性を持っているのかとびくびくしながら接している。

……この人、まさにライブハウスの店員って感じだな。

結束バンドの奴らとかと接していると麻痺するが、そもそもライブ

ハウス自体アウトローというか学歴社会から抜け出した人間の居場所ともなる場所だった。こういう人も多いのだろう。

「あ、はい。大人しくオーディション見ます」

不覚にも後藤みたいな話し方になってしまふ俺。それを見たPAさんは、本心を読ませないような笑みを浮かべた。

やがて結束バンドの面々がステージに出てきて、機材の準備を始める。彼女らの表情は硬い。当然と言えば当然だが、しかし演奏するのにやや支障が出そうなほど緊張しているように見えた。

「大丈夫か……？」

思わず眩くが、今の彼女たちに直接声をかけるわけにもいかない。俺にできるのは見ていることだけだ。

やがて準備が整ったらしい結束バンドは、こちらに緊張した顔を向けた。

「あ……け、結束バンドです！ えと……オリジナル曲の『ギターと孤独と蒼い惑星』、やりますー！」

伊地知先輩がステッキを叩く。乾いた木の音が四度響いた後、演奏が始まった。

「……」

息の合った音が入ってくる。

しかし審査をする店長の目は鋭い。PAさんは、相変わらず何を考えているのか分からないニコニコ笑顔だ。

ギターの音色が心地よい。それを支えるベース、ドラムがリズムを作る。

何よりも、歌詞だ。俺は歌のフレーズに引き込まれていて、それどころではなかった。

後藤の書いたという歌詞は、孤独に生きるものの叫びを代弁してくれているようだった。

己と違う、明るい世界。リア充の、陽キャの、高校生への違和。それらを荒々しく歌い上げる喜多という陽キャの中の陽キャ。

ああ、これが結束バンドの個性か、と納得させられる。

違う個性を持った人間が集まって、曲を作って、演奏して、それが

バンドの色になっている。

ああ、今まで俺自身が触れてこなかったから分からなかったが、バンドというのは存外陰キャにとって良いものなのかもしれない。

違うこと、特異であることが武器になる。

個性を強調することこそが、自分たちの音楽になる。

それは、学校や社会という窮屈な居場所よりもずっと良いものに見える。

物思いに耽る俺を置いていくように、彼女たちの歌はサビに突入する。

足りない足りない、と歌う喜多の横、俯き加減に演奏する後藤の様子が何か変わった。どこが、とハッキリ言えるほど詳しくはないが、それでも彼女の纏う雰囲気が変わったことだけは分かる。

魅せられる。見入ってしまう。

黒いギターを夢中でかき鳴らす後藤の姿は、まるで自分はこれだけのだと主張しているようですらあった。

やがて音が静かになっていく。山田先輩と伊地知先輩が目を合わせて、タイミングを合わせて曲を終わらせる。

演奏を終えた結束バンドの面々は、疲労から少し頬を上気させながらこちらを見つめていた。

相変わらずの無表情でそれを見ていた店長が、口を開いた。

「うん、結構いいんじゃないか」

全員の表情が、ぱっと明るくなる。

「と、言いたいところだけど」

そう言いながら、店長は冷静に結束バンド一人一人の欠点を指摘し始めた。指摘を受けるたびに視線を落とす彼女たち。

そして最後に、少し視線を逸らしながらこう付け加えた。

「……まあでも、お前らがどういうバンドなのかは分かったよ」

「あ……ありがとうございます」

伊地知先輩がうつむきながら答える。

「え？　なんでそんな返事なの？　（こ）喜ぶとこだよ」

「……………え？」

……ああ、また店長のツンデレが発動している。俺にはなんとなく分かってしまった。

「店長、合格ならハッキリ合格って言ったらどうですか？」

「……え？ だからそう言ってるじゃん」

その途端、結束バンドの表情が一斉に明るくなった。

念願の合格をもぎ取った彼女たちが湧き立つ。

「もう！ お姉ちゃん分かりづらすぎー！」

「まあ、私は分かってたけどね。なんなら次の曲のことを考えてた」

「やったね、後藤さん！」

喜多が後藤の元に駆け寄り手を取る。

最初は喜んで顔でそれを受け入れていた後藤だったが、急に彼女の表情が変わる。

「すつ、すいません喜多さん……慣れないことしたから……胃酸が……」

端っこの方に駆け込んだ後藤が、ダムの放流のような嘔吐を始めた。

「ご、後藤さーん!？」

「……」

何か見てはいけないものを見ている気がして、俺はそつと目を逸らした。

「後藤、お疲れさん」

「あ、比企谷さん。お疲れです」

ぺこりと頭を下げてくる後藤。

「オーデイション、合格で良かったな」

「は、はい……それに、私も前よりもバンドをする理由がハッキリした気がします。……比企谷さんと話していると、不思議と自分の気持ちに整理がつけやすくなりますね。ありがとうございます」

「……そんなに感謝されるほどのことはできてないぞ」

今日のオーデイションを見て、俺は改めて後藤のことが分かった気

がした。こいつは、見た目よりもずっと強い人間だ。

俯いて現実から逃げていてるだけじゃない。俯いたままでも自分を、唯一無二の自己を主張している。

「気づいたんだ。お前には、実は俺の言葉なんて必要なかったこと。そんなものなくなつて、お前はきつと立ち上がって、結束バンドの仲間と協力して、成功していったんだらうなつて」

ああ、これは俺の嫌いな無意味な言葉だ。自分の感情を他人に押し付けるだけの感傷。

これ以上言い募るのはやめだ。率直に、自分の想いを伝えなければ。

「俺は、お前の演奏が好きだった。細かいことは俺には分からなかったけど、弾き方とか、弾く姿勢とか、伝わってくるものとか、そういうものが好きだった。お前の作った歌詞が好きだった。歌のワンフレーズワンフレーズが、まるで俺を、ぼっちを掬い上げてくれるようだった。……ああ、やつぱり言葉にするとうまくいかないな。——とにかく、俺は舞台上に立っているお前が好きだったんだ」

自分でも分からない言葉をまとめて、後藤の様子を見る。彼女の顔——見たこともないくらいに真っ赤だった。

「あつ……うあつ……へ……」

「……あれ、俺そんな恥ずかしいこと言ったか？」

いや、思い返せば結構言ってたかもしれない。

「あああああ、ありがとうございます！……その……比企谷さんにそう言われるのは、とても嬉しいです」

後藤の慌てた様子に、俺の頬までほんのりと温かくなってしまう。ほんの少し、胸の鼓動が早くなる。

「……」

沈黙。お互いに顔を見れない。鼓動は早くなる一方だ。

——俺は、自分の中に芽生えた後藤に対する感情に名前をつけかねていた。

ダメな大人とダメなぼっち

「たすけてください。のるま5枚」

休日、家でゴロゴロしていた俺に届いたロインは、後藤からの悲痛なSOSだった。

おそらく、ライブのチケットノルマのことだろう。結束バンドが初ライブをできるということで、後藤たちは一人五枚のチケットをさばかないといけないらしい。

そういえば彼女は、チケットノルマの話聞いた時に凄まじい表情をしていたな。

なんと返そうか。俺も結局ぼっちなので、人数を集めるのは役に立ちそうにないんだが。

少し考えてから、メッセージを返す。

「どこどこにいるんだ？」

「地元です」

神奈川とは遠いな。とは言っても行けない距離じゃない。

「手伝う」

「たすけてくれるんですか……？　もしかして私の代わりにノルマ5枚さばいてくれますか？　あつ、ライブに来るのはできれば優しい人の方がいいです。私が下手くそな演奏しても許してくれる人。あつでもあんまり陽キャっぽい人はちよつと」

「お前やっぱ凶々しいな……」

メッセージでやり取りをしているだけなのに、彼女のどもった声が聞こえてくるようだった。

GPSを頼りに知らない道を歩いていると、後藤から俺を案内するメッセージが届く。

「——そのローソンの脇の公園です。人がいないので落ち着く場所です。うみがきれい。のるまは5枚」

知らんわ。自由律俳句みたいなメッセージが返ってきたのを確認

して、見知らぬ道を歩く。

海の近くを歩いているので、潮の香りがわずかに鼻に届く。

しかし、この俺がわざわざ休日に出までするとは、少々感情に引つ張られすぎだろうか。俺らしくもない。

あのオーデイションを見て以来、俺の中での後藤の見え方が変わった。

今までは、まるで出来の悪い妹でも見ているような気分だったのかもしれない。俺と似たボツチで、俺よりも変な奴。

そう、舐めていた。悪い言い方をすれば、下に見ていたのかもしれない。

それが覆された。

あの時、自分の生き方はこうなんだと示すようにギターをかき鳴らした彼女は、俺なんかよりずっと堂々としていた。

惹かれている、のかもしれない。しかしそれを恋と安易に定義するのは抵抗感がある。

憧れ、の方が近いのかもしれない。後藤にそんな思いを持ったなんて、俺のプライドが反射的に否定しそうになる。けれどあの時の彼女はたしかにカツコよくて……

ぴろん、と気が抜けるような音がする。スマホを見ると、後藤からの新着メッセージが来ていた。

「なんだよ、もう着くって……」

メッセージはたったの4文字だった。

「たすけて」

だから手伝うって言ってるだろ。

そう思っていると、次のメッセージが届く。

「この人こわいです。たすけて」

何があつた？

不穏なメッセージに、一瞬で思考が脳内を駆け巡る。後藤は人のいない公園にいてと言っていた。

加えて、彼女はよく見るとかなり整った顔をしている。野暮ったいジャージ姿に騙されがちだが、街中で前髪を上げれば人の目を引くほ

どだろう。

もしかして、ガラの悪い男に絡まれているのだろうか。

だとすればマズい。ただでさえ人が苦手な後藤がそんなイベントに耐えられるとは思えない。

「っ」

自分の想像が当たっているとも限らない。しかし俺は、その場から駆け出した。

手に持つスマホに110と打ち込む。何かあったらすぐに通報する。

後藤の姿が見える。すると、彼女を引き留めるように立っている女の人の姿が見えた。

やや声を大きくして、俺は問いかけた。

「あの！ なにしてるんですか？」

後藤がこちらを向く。その顔は——案外余裕があつて、俺は胸をなでおろした。

「あれえ、ひとりちゃんのお友達？」

ふらふら、と後藤と一緒にいた女の人が俺に近寄ってくる。細い目に赤い髪。

ふわふわした表情は、あまり悪人には見えなかった。

けれども。近づくと分かることがあつた。

「うわっ、酒くさっ！」

「ちよつと！ 女性に向かって開口一番くさいとは何事だあ！ ほら、反省しろお」

はあ、と女性が息を吐くと、生臭い匂いが鼻を蹂躪した。

「ちよ、なんでこんな昼間からこんなに酒臭いんですか!? 離れてください。ちよっ、近い近い！」

「ええー、もしかしてちよつと照れてる？ 若いねえ！ 何歳？ お酒飲む？」

女性はよく見るとやたら薄着だった。緑色のワンピースの下から肌色がちらちら覗く。言動は壊滅的な彼女だが容姿は魅力的だった。

彼女が俺の肩をばんばんと叩く。

「お、お姉さん。あんまりそういうのはちよつと……比企谷さん困ってますから」

後藤が弱々しく女性を制止する。気弱な彼女にしては珍しい言動に、俺は少し驚いた。

「ああ、ごめんごめん。いたいけな少年の心を弄るのは良くないね、うん」

「いや、全然弄られてないですけど。酒臭いお姉さんの退廃的な魅力なんて微塵も感じてないですけど」

願わくばもう少し近くで見たかった、とか全然思っていない。

「ひ、比企谷さん、今日は私のことを手伝ってくれますよね？ 変なお姉さんにふらふらついていたりしないですよ？」

後藤の目はいつもより真っ直ぐに俺を見ているように感じた。

「当たり前だ。俺の理想は俺をヒモにしてくれる女の人だ。こんな頼れなさそうな、むしろこつちにもたれかかってきそうな人はお断りだ」

「あれー？ なんか私ディスプレイされてる？ ねえ、私たち初対面だったよね？ なんかひどくなーい？」

俺の言葉を非難するお姉さんには目もくれず、後藤は俺のことを真っ直ぐに見ていた。前髪の方この綺麗な瞳を直視すると動揺する。

やがて後藤は、何事か考え込むように顎に手をあてた。彼女特有の独り言の際の早口が発動する。

「ヒモにしてくれる女の人……私は？ 私は……むしろヒモになりたい、というか引きこもりになりそう……バンドで売れなかったら……いやでも比企谷さんは案外頭いいし、なんだかんだ働くんじゃない？ ハッ！ 私はいったい何を考えてるんだ!? ちがうちがう。全然そういうのじゃ」

そんな不審な様子の後藤に、お姉さんは目の前まで行ってひらひらと手を振った。

「ひとりちやーん？ おーい。お酒飲んでる？ ひとりでブツブツ言ってるの結構怖いよー？」

「いつものことですよ。こいつシラフで薬キメてるみたいな状態ですから」

正直ヤバい時の言動はこの酔っ払いお姉さん以上だ。

「お姉さんはどうして後藤と一緒に？」

「私？ きくりでいいよー。廣井きくり」

廣井さんはずっとニコニコ笑っていた。

「……廣井さんはどうして後藤と一緒に？」

「ええー、照れてる？」

「いえ全然。酒臭いので離れてください」

いやまじで酒の匂いがすごい。女の人は近づくといい匂いがすると漫画で学んだのだが……。

「私が酔ってたら介抱してくれてね。そのコンビニでお水と酔い止めとしじみの味噌汁買ってきてくれたんだー」

「至れり尽くせりですね。ていうかそれ、絶対廣井さんが一方的に要求しただけでしょ。やってること強盗と変わりませんね」

「あれ？ 初めて会ったのにやけに私の行動に詳しいね」

廣井さんがどんな人間なのかは、ちよつと話ただけでだいたい分かってきた。

この人はあれだ。ダメな大人の見本みたいな人だ。俺の親父もダメな大人の代表選手だったので、見覚えがある。

「それで、廣井さんはなんで後藤を引き留めていたんですか？」

「いやあ、なんかせっかく買ったギター売るって言ってたからさー。せめて楽しみが分かるまでは続けてみよーって言ってたんだ」

少し衝撃を受けて、後藤の方を見る。

彼女は俺の視線を受けるとそつと下を向いた。……コイツ、嘘ついたな。

「で、嘘だったわけですね」

「え？ そうだったの？ ひとりちゃん凄いな。流れるように嘘吐くじゃん」

廣井さんの視線が向くと、後藤がさらに下を向く。

「で、二人はなんでこんな人気のない公園に？ もしかしてデート前

だった?」

「えっ!? いっ、いやそれは……」

「いや、違いますよ。後藤がノルマのチケットをさばかないといけないので、手伝いに来たんです」

「……」

なぜかちよつと不満げな顔で俺を見る後藤。なぜだ。ちゃんと状況を説明しただろうが。

「チケットノルマかあ……懐かしい。私も苦勞したなあ。よし分かった。ひとりちゃんのチケットノルマ、私が手伝ってあげよう!」

おお、さつきまでただの酔っ払いだった廣井さんがちよつと頼もしく見える。

後藤もそれを見て目を輝かせていた。

「か、買ってくれるってことですか?」

「いや、それはひとりちゃんの演奏を聴いてからだね。それよりも、お客さんを集めるべきでしょ。——だから、私と路上ライブしようか」

廣井さんの言葉に、後藤は大きく目を見開いた。

意外と、彼女は度胸がある

「あいつ、大丈夫かよ……」

俺の視線の先には、路上ライブの準備をする後藤の姿があった。かなり緊張しているようだ。ギターを準備する手は小刻みに震えているし、背中はいつもの以上に頼りなく曲がっているし、顔はなんかちよつと溶けてきている。

おい、なんで人間の顔が溶けるんだよ。あいつはスライムか。

「あれー？　ひとりちゃん緊張してるー？　大丈夫大丈夫！　この天才ベーシストの廣井きくりお姉さんがついてるから！　……あ、待ってごめん。吐き気が戻ってきた。タンマタンマ」

女性がしてはいけないようなヒドい顔をした廣井さんが地面に座り込む。明らかに頼れなさそうな姿に後藤がさらに不安そうな表情をした。

周囲を見れば、意外と人が出歩いている。どうやら近くでお祭りでもやっているらしい。浴衣姿の人たちがチラホラ見える。路上ライブをやるにはかなりの好条件と言えよう。もともと、それが後藤にとって幸運なのかは分からないが。

彼女があまりにも緊張した様子だったので、思わず近づいて声をかけてしまった。

「おい、後藤」

「は、ひゃい！　なんですか!?!　あ、比企谷さん私の代わりに弾きますか？　だ、大丈夫です！　演奏なんて適当にやってればなんとかなりますから!」

「ギターリストの誇りを欠片も感じない言葉だな……」

相変わらず凄い演奏と普段の言動が全く一致しない奴だ。

「じよ、冗談はともかく、集中しないとですね。大丈夫。私は登録者数3万人の女……ネットでは認められたギターリスト……」

ブツブツ呟く態度は、先ほど心配していた時よりはマシに見えた。声をかけに来るなんて慣れない真似しなくても問題なかったかな。

俺は後藤の様子に一安心した。

「ひとりちゃん、準備できたー？」

「あっはい。もうできます」

あれだけ怯えていたのに廣井さんに頼まれるとすんなりやる気になるらしい。あるいは、断るのも怖いという臆病心が彼女の勇気の源だろうか。

二人が楽器を持ち、今日限りのステージに立つ。準備は完了だ。

少なくとも後藤には知名度なんてないはずなのに、突然の路上ライブにはそれなりの人が集まっていた。

廣井さんは相変わらず上機嫌な笑顔だが、一方の後藤はかなり緊張した表情だ。

人の目も真っ直ぐ見れない彼女にとって、路上ライブなんて相当ハードルが高いはずだ。

演奏を目前に控えた後藤の目が、こちらを見るのを感じた。怯えた、だけど綺麗な目に、俺は小さく頷いた。

お前ならできるだろ、と目に力を籠める。後藤ひとりなら。オーデイションであんなにも心惹く演奏をしてみせた彼女なら、きっとできる。

俺の視線を受けた彼女は、ちよつと目を開いたかと思うとやがて静かに頷いた。

ああ、大丈夫そうだな。

廣井さんが後藤に何事か話しかけた後、演奏が始まった。

最初は物珍しさに集まった人たちも、少し興味を惹かれたようだ。ギターとベースの奏でる知らない曲。

素人なりに、廣井さんのベースはかなり上手いのだろうと感じた。初めて弾くはずの曲なのに迷いなくベースを奏でている。

そして後藤は、やはり緊張しているのだろうか？ いつも以上に背中が丸まっているように見える。

「……が、がんばれー」

観客のうちのひとりから声が上がった。華やかな浴衣に身を包んだ大学生くらいの女性だ。

思わず声を上げてしまった、といった様子の彼女。

大勢の人がいる中の、たったひとりの声だ。

しかし、それは聞いた後藤ひとりの様子は明らかに変化した。

彼女が顔を上げ、観客の方を見た。目に見える変化とえばそれだけだ。

けれど、音が変わった。

観客の関心は明らかにギターを奏でる彼女に集まり、後ろでベースを弾く廣井さんが細い目を開いた。

よく見れば、後藤の長い前髪で隠れた片目は薄っすら閉じている。けれど片方の目は、しっかりと己の音を聴く観衆を見据えていた。

「ッー」

演奏が終わり、観客からはまばらな拍手が起きた。

きつと、ドームを満員にするアーティストに比べれば取るに足りない数の称賛なのだろう。

けれど後藤ひとりには、ひどく満足げに見えた。

「お疲れさん。その、上手く言えないけど良かったぞ」

「あ、ありがとうございます。……その、比企谷さんにそう言ってもらえると凄く嬉しいです」

「……おう」

俺が言葉をかけると、彼女は珍しく目を合わせて、ふわりと笑った。

普段は伏せられている綺麗な瞳を直視すると、鼓動がひどく乱れるのが分かる。

そんな風に会話をしていると、先ほどの観客のうちふたりがこちらに歩いてきた。

「あのー、チケット買っていいですか?」

「えっ!? あっ、ひゃい!」

突然話しかけられた後藤は凄まじい動揺を見せその場から逃げ出しそうですらあったが、やがて嬉しそうに二人にチケットを渡した。

その様子を遠くから眺めているのは、なんだか不思議な気分だ。娘

が初めて立ったのを見た父親とかこんな気分なんだろうか。いかな。今からハンカチ用意しとかないと……。

後藤があたふたしながら会話しているのを聞いていると、廣井さんがニコニコしながら近づいてきた。

「ひとりちゃんよかったねー」

「そつすね。廣井さんがいなかったらこんな上手くいかなかったと思います」

俺が手伝ったところで、後藤にこんな貴重な経験を積ませることなんてできなかっただろう。

「比企谷君には分からないかもしれないけどね、自分の音楽を聴いてほしい人がいるって結構良いモチベーションになると思うんだよね」

「ああ、あの二人は後藤にとって初めてのファンですもんね」

笑顔で後藤に手を振って去っていく二人の女性は、この短い時間で後藤のことを応援することに決めてくれたようだ。

「ああー、まあそういうことにしとくかあ」

俺の言葉を聞いた廣井さんはちよつと苦笑いをした。

その反応に首を傾げた俺の耳に、遠くからの呼び声が聞こえてきた。

「あのー！… ここでライブやっちゃダメですよー！」

警察官らしき人が注意しに来たらしい。路上ライブもここでお願いします。

「あ、わ、私補導される!? お、お母さんたちにはこの事は内緒に……」

汗をダラダラ流した後藤が手錠をかけられるような仕草をする。

「この程度で補導されるわけないだろ。心配しすぎだ」

「あ、その男の子はちよつと話を聞いていいかな?」

「え、俺だけですか!」

ひどい！俺はただライブを聴いていただけなのに！

警察官に彼女たちとは知り合いであることを丁寧に説明して、ようやく納得してもらった。

絶対見た目で判断されただろ……。まあ、見目の良い若い女性であ

る後藤と廣井さんと一緒に目の腐った奴が話してたら警察としては話を聞かずにはいらなかったのだろう。

廣井さんは、後藤のチケットを一枚買うと電車で帰って行った。

……しかし電車が足りないらしく、仕方ないので俺が金を貸した。今度会ったら絶対に回収する。なんで俺は年上の女性の電車賃をおごらないといけないんだ。

「あ、あの比企谷さん」

「なんだ？ 後藤はああいう人に金貸すなよ」

返してくれ、が言えなくて搾取される未来しか見えない。

「あ、それはもう遅いというか……じゃなくて、え、えっと今日のライブ、どうでしたか？」

「……ああ、良かったよ。ガッチガチに緊張してたからどうなるかと思っただけだな」

「え、えへへ……」

後藤は嬉しそうに笑顔を見せて、反対側を向いて忍び笑いを始めた。

ああ、そうしていると普通に可愛い女の子だな。

「ふへ……へへへ……フヒツ……ふへ……ふへへへへへ」

「おい、怖いからそろそろ笑うのやめてくれ……」

というか美少女のする笑い方じゃないだろ。

後藤は俺の言葉が耳に入っていないようにしばらく気持ち悪い笑い声をあげていたが、しばらくすると落ち着いてこちらに向き直った。

「あ、そうだ比企谷さん。……こ、これもらってくださいますか？」

後藤が俺に差し出したのは、彼女が売ろうと必死になっていたチケットだった。

「……もう5枚売れたんじゃないのか？」

「は、はい。でも、比企谷さんにはノルマとかじゃなく渡したくて。

……も、もらってくださいますか？」

彼女の瞳が不安げにゆらゆら揺れる。

俺はガシガシと頭を掻いて、その紙切れを受け取った。

「当たり前だろ」

俺がお前たちの初ライブに行かないわけがないだろ。そういう意思を籠めて返答すると、後藤はまた嬉しそうな笑顔を見せた。